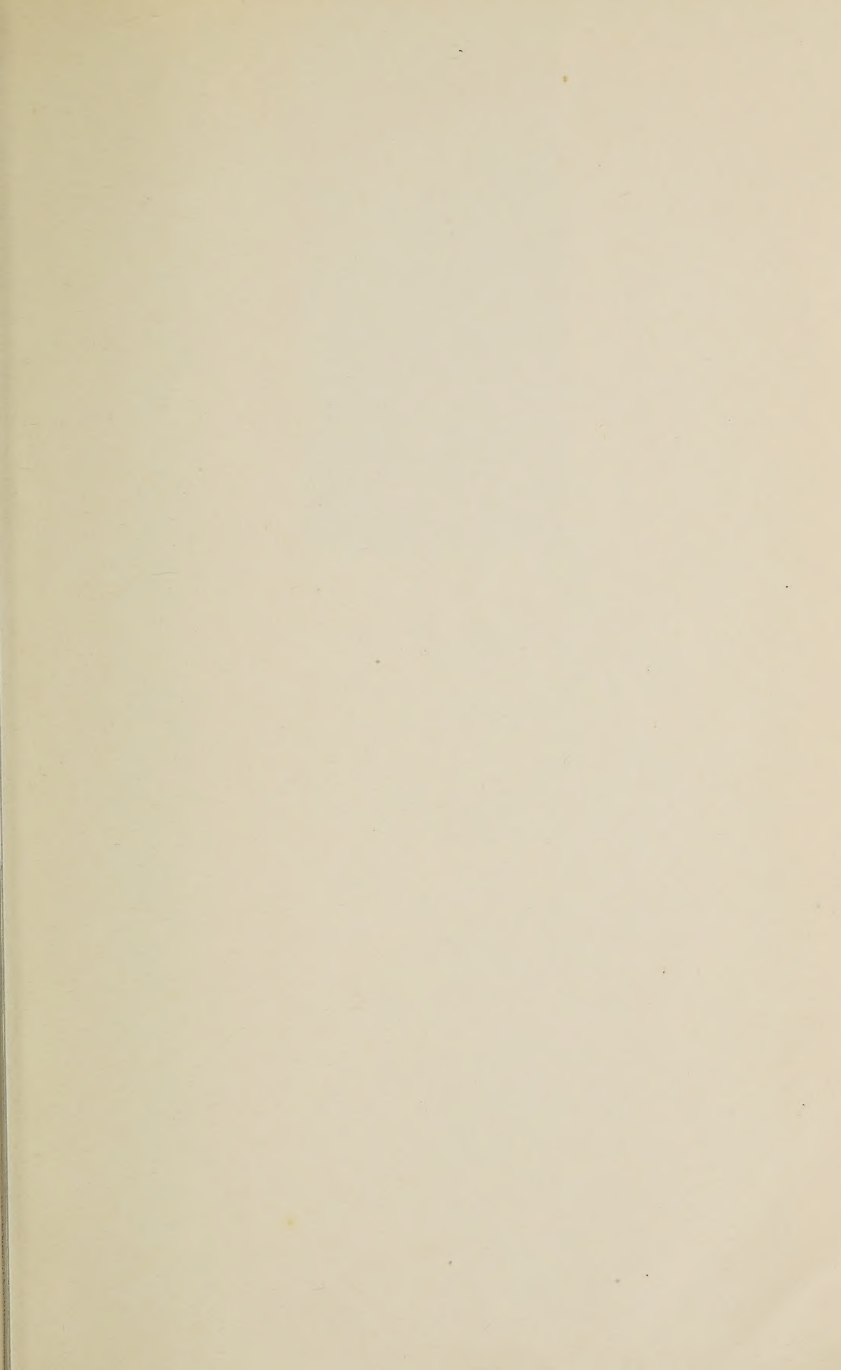
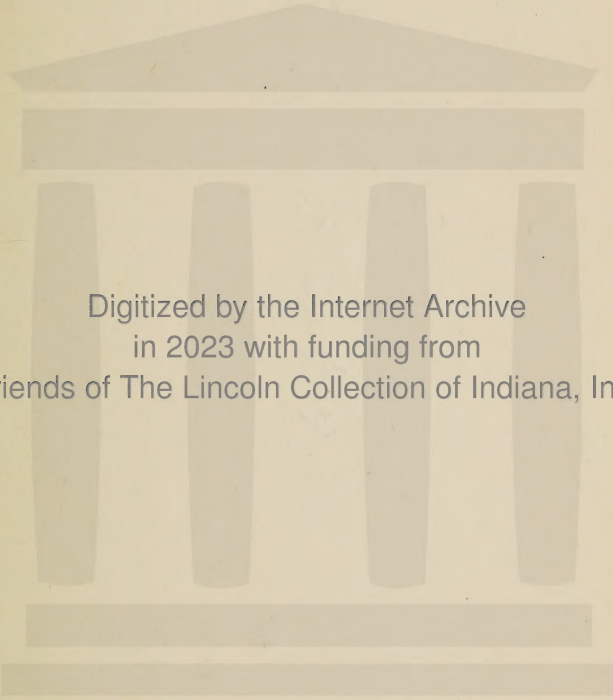
松村介石著

アブラハム

リンコルン傳

警醒社書店

アブラハム リンコルン傳

自序

嗟乎今や我國の小説家は、椽筆を揮て競ひ出で、孰れも眞人物を書かんと欲す、而して能はず、空しく才子的の文を弄して、空しく才子的の人物若くは俳優的の豪傑を書く。今や有志者は群り起りて孰れも政空に搏たんと欲す、若かも多くは策士權術家のみ、悲焉。我國後進の子弟等は、今や殆ど師表を喪ひ、將に一身並に國家を誤らんとす。當此時、苟も青年の友たるもの、若くは愛國の心あるもの、誰か之を觀て情意烈々たらざらんや。今夫れ倫氏は如何なる人ぞ、即ち我國諸人士の師表に非ずや、彼れは賤陋の農家に生る、然れども決意精勵、忍克不撓、遂に大志を成全せり、是豈我國貧生の良師に非ずや。彼れは力役社會濫行漢の群に入れり、然れども自ら守て濫行せず、屢々酒奴の

席に列せり、然れども自ら制して飲酒せず、人皆浮而彼獨實、人皆佞而彼獨直、一生至誠を貫きたり、是れ豈我國輕薄才子の嚴師に非ずや。然而功成りて矜らず、身富んで驕らず、終始平民的の人格者なりしは即我國有志家の模範にして、公明正大、天眞爛熳、赤心を攄へて、衆庶を愛し、遂に其身を國家に殉へたるは、即ち我國政治家の標準に非ずや。

且つ余れ從來の傳記を觀るに、專ら俊傑の奇事異聞卓言偉行を蒐錄するを勉めて、而して其奇事異聞卓言偉行の由て來るところの源頭如何に注目を怠るもの丶如し、即ち徒らに英雄豪傑の言行を書いて、其英雄豪傑が英雄豪傑たるに至りし所以の道を講することを忘れたるもの丶如し。余や不肖固より其人に非ずと雖ども、常に玆に慊なき能はず

以是、今この倫古龍傳を編すに於いても、大に茲に意を用ひ、啻に倫氏が言行を審かにするに止らず、併せて又倫氏が倫氏たるに至りし所以の道を明にせんと欲す。即ち讀者をして眞人物たるの順序方法を知らしめんと欲するなり。

左れば、嗚呼、我が菜根を咬んで苦學する青年諸君よ、來れ、來りて阿ブラハム、倫コルンを見よ、勇氣必ず百倍せん。俗を追ひ、世に漂ひ、嚅呢子々、生を貪り身を辱しむる友よ、來れ、來りて阿ブラハム、倫コルンを見よ、曉然慚愧、悛悔の涙堰きあへざるものあらん。然而我國今日の形勢を觀て、傾頭愁眉、進んで狂瀾を廻すの難きを憂へ、退て師表の乏きを悲み、誠心を擁して立つ志士よ。來り、來て、阿ブラハム、倫コルンを見よ。奮然、裳を搴げて、直に倫氏が蹤を追は

んと欲するの情念を振起して止まざるに至らん。

明治廿三年十一月　　著者識

目次

豪傑論……一
幼少の時代……一七
青年の時代……四四
其容貌……五五
其智辯……六六
其德行……七三
其宗教……八四
政治の時代(上)……八九
代言の時代……一〇二

政治の時代（下）……一一九
大統領の時代……一四五
其　死……一八五
其周圍と時勢……一九三
結　論……二〇〇

豪傑論

諺曰人は萬物の靈長なりと、顧みて吾人は惑ふ、力、熊虎に及ばず、軀幹、象犀に如かず、長蛇に怖れ、巨鱷に慄き惴々焉として世を渡る、彼れ人にあらずや。彩羽を飾り、美毛を裝ひ、林に囀じ、野に歌ひ、豐滿飛躍、以て天地に遊食す。此れ鳥獸の性命なり。然れども彼れ人に至りては、弊褐を纏ひ、垢褸を衣、日夜營々殘身苦形、而して衣食動もすれば給せざらんとす。吾人は常に多く此等の人類を見る。而して惑ふ。此れ萬物の靈長乎と。

雖然、今若し、眼睛を一轉し去て、世に所謂る、英雄豪傑なるものを想見し來るときには、全くこれが反對に出で、彼等が力量の餘りに宏大秀拔なるに心驚き、彼等が行跡の餘りに魁偉絶倫なるに魂消えて是れ豈に人中のものか、抑々將た人外のものにはあらざるかとの疑問と嘆聲とを惹起せずんばあらざるなり。同じく是れ人なり、其の依るところは、同じく五尺高低の體、其彈するところは同じく三寸長短の舌、小人をして之を用ひしめなば、牛馬と力を角して及ばず、犬狼と競吠して克たず、逡巡畏縮、後へに瞠若たらんとす。然れども若しそれ之をして英雄豪傑の用ゆるところたらしめなば、一起して歐洲を蹂躙し、一説して六國を連合す、如何に士壯に民庶きも始皇徴つせば、萬里の長城は起るに因なく、如何に術進み奴多きも、ファラオの一令あ

らずんば「ピラミッド」は半天に聳ゆるの由なけん。若しも通常の人をして兩腕雙脚あるものとせば、英雄は正に千腕萬脚を備ふるものなりと謂ふて可なり。若しも通常の人をして一銃を肩にし一劒を帶ふるものたりとせば、英雄は正に千銃を肩にし萬劒を帶ぶるものと稱して可なり。何となれば英雄一呼して起つときには、千卒忽ち動き、英雄一令して進むときには、萬劍忽ち閃けばなり。是れ啻に政治上軍事上に於て之を見るのみならず、社會上文學上に於ても亦同しく之を見るなり。彼の船車を見よ、大海を截り、曠原を斷ち、汽笛喨々、長蛇、蜒々軌上を行く。世人は之を見て誇て曰く、是れ人の人たるゆゑんなりと、然れども此物如何なるところより來る。之に乘るもの之を知らず之に誇るもの亦た之に與らず。唯だ夫れ英雄ワットが一腦頭より塗出

し來るものゝみ。一瞬坐して洋海を超え、天涯萬里の異郷に達し忽ち消息を通じて還る。是れ則ち人間の靈長たるところなりと謂ふ。然れども是れまた誰れの賜ぞや。若しもフランクリン微りせば、たとひ千億萬人雷鳴に遇ふとも之を看過し閑過して已みたらんのみ、何ぞ其今日あるを必せんや。要するところ其の何事にもあれ、英雄豪傑なるものゝあるありて、始て人間に價値を與へ、所謂る萬物の靈長たる名稱を附せしむるを得るものとす。彼の凡々たる人物何かあらん。若しも英雄微つせは、余輩は人間社會を觀て更に慰むるところなく、進歩の希望を有せざるなり。

讀者もし尙深く此等の感覺を强めんと欲せば、請ふトマス、カライルの言を聽け、曰く凡そ人間社會の事物は畢竟英雄豪傑の化身體にし

て而して萬國歴史とは卽ち英雄豪傑の言行錄に外ならずと。此言や初めて之を聞けば徒に誇大の言の如し。然れども深く人間社會の狀態を觀察して其趨向を玩味せば、必ずしも徒に人を驚かすの言たらざるを知らん。今試に孔子と云へる一人物を拔き去て、支那と日本との歴史を考察し觀るべし。釋迦と云へる一人物を寂滅せしめて、此等の國の社會を假想し觀るべし、アリストーテルを除き、コロンブスを除き、マホメツトを除き、ルーテルを除き、ノックスを除き、而して又天下の歴史を想像し觀るべし。思半に過るものあらん。加之眼を開て古今の歴史を通觀せよ、凡そ種族の起る必ず酋長あつて存す。凡そ文化の興る必ず非凡の人物あつて存す。其發明と云ひ、發見と云ひ、工夫と云ひ、企圖と云ひ、凡そ社會の開進に屬し進步に屬し、自由に屬し革命に屬する

ものゝある時には、必ずや當時に獨秀したる英雄豪傑なるもののあありて、之が嚮導者たらざるはなし。是れ唯り神物小說時代に於て然るのみならず、實に實事的時代に於て尙ほ其然るを見る。唯り戰國世界に於て之を見るのみならず、又太平の時代に於て之を見るなり、豈啻政事世界に於てのみ然らんや。豈單だ文學世界に於てのみ然らんや。實に宗敎界にもあれ、美術界にもあれ、陸にもあれ、海にもあれ、苟も人間社會の事物の運動する處には、必ずや之が先導者たり、首唱者たり、將帥たり、首領たるものゝ存在せざるはなし。

或人曰く古代に在ては則ち然らん。然れども英雄崇拜の時代は、最早や過ぎ去れり。見よ旣に今日に至りては、人々己が權利を知り、己が自由を審かにしたるが故に、獨立の氣象旺生して、自重の精神勃興せり

又何ぞ彼の英雄をして獨り其力を世に恣にせしむることを許さんや。事は輿論に決し物は共和に成る。今日はまた昔日を以て論ずべからずと。其れ然り、然れども是れ唯其趣を異にしたるのみ、輿論によりて社會を組織すと云ふ。然れども輿論も亦主唱者を要するに非ずや。共和に頼りて國家を治むと云ふ。然れども共和國も亦大統領を要するにあらずや。一會の起る必ず會長を撰び、一社の起る必ず社長を置く。たとひ偶像的の崇拜が今日は變じて道理的奉戴となりたるにもせよ、其はたゞ趣を異にしたるのみ。實際に於ては則ち同じ。是れ自然の勢なり。トマスカライル又曰く英雄は世の終迄必要的の動物なり。社會は到底英雄なくして救濟せらるゝものにあらずと。前後の二言一として吾人を欺かざるなり、左れば眼を開て目下我國社會の現狀を觀よ、上は政

治、宗教、文學、軍事等より下は工藝百般の業に至るまで、悉く英雄豪傑の必要を感ずること甚だ急なるに非ずや。遠慮なく之を云へば、今日の內閣を始め、其他諸官樞要の地位に立つところの有司等は、孰れも皆非凡の人物、我が所謂英雄豪傑の人たらん。然れども其中には老年の悲しさ、復た物の役に立ち難しと嘆く人もあるなるべく、前世界には拔山倒海の技倆を逞うせしかとも、時勢全く變替し來りて、今日にては一向相談にならぬ方もあるなるべし。或は又戰時飛動の龍、空しく平時匍匐の蛇たるもの、若しくは左程の實力あるにあらずと雖ども、來歷の推すところ、終に上座を占めたるもの亦た決して無しとすべからざるべし。要するところ明治維新の功臣の世は彼等の年と共に荏苒縮まり來れり、而して之を繼ぐべきのそれ何處にや在る。或は曰く民間にありと、

或は曰く後進官吏の中にありと。吾人はその果して何れの邊にあるやを知らす、吾人は唯だ其人物の必要を感ずるの急なるを知るのみ。政黨は各々旗幟を翻へして、益々相角逐すべし。然れども誰か此が將たり佐たり尉たるものぞ。今日の如き日本に於ては、人物の進步毎に時勢の進步に晩れがちなるを以て、今日中流に棹さすもの、動もすれば忽ち推し流がされて、遙か下流に漾々たらんとす。此の時に當りて尤も必要なるものは新しき人物、新しき豪傑、今日の時勢に處し、今日の時勢を制し得る實力ある人其人を得んと是なりとす。是れ啻に政治上に於て然るのみならず、宗敎上に於ても亦然り、獨り宗敎上に於て然るのみならず、文學、工商農其他百般事物の社會に於ても、亦た同じく然りとす嗟呼要するところは英雄なり豪傑なり、人間社會に英雄あるは、猶ほ人

に目あるが如く、天に日あるが如し。若しそれ此物微からんか、世は乍ちに暗黒となり、人は乍ちに盲目とならん。

それ然り、然れども吾人は如何にして此英雄豪傑たることを得べきか。是れ次に來るところの問題なり。苟も人と生れたるもの、誰か希望なきものやあらん。誰か衆人に立優りて景仰せらるゝことを欲せざるものやあらん。誰か禽獸と伍をなし、牛馬と食を爭ふて生死する人非人たることを欲する者やあらん。其の殖産工業界にあるにもせよ。其の農商界にあるにもせよ。其の教育界にあるにもせよ、其の宗教界にあるにもせよ、政治界にあるにもせよ、文學界にあるにもせよ、其如何なる社會にあるにもせよ、好んで此が小使となり、好んで此が卒徒となり、好んで人の牛後となり、好んで人の驥尾につき、好んで平々凡々

たる人物となつて、而して復となき此の貴重の一生を碌々閑過せんと欲するものそれ世にあるべけんや。是れ人の情に非ず、若夫れ靈魂を備ふるものたらしめば、必ずや上りても尙上り、進みても尙進み、十人を凌ぎ、百人に駕し、此が長となり、此が頭となり、此が主となり、此が將となり、以て其力量を世に顯はし、芳名を竹帛に垂るゝことを欲せざるもの必ず無らん。卽ち隨處に英雄豪傑となりて以て社會に運動せんと欲せざるもの必ず無からん。然れども如何にして其所謂英雄豪傑たるを得べきか。

世に一種の人物あり。英雄豪傑たらんことを欲し、謂へらく英雄豪傑は大言を吐くに在りと。而して無暗に大言を吐く、謂へらく英雄豪傑は胴音を發し、濶歩をなし、疎暴に振舞ひ、細瑾を顧みざる是れなり

と、而して矢鱈に其聲を濁らし、其歩を大にし、疎暴に不行狀に立居振舞ふて、而して謂へらく是れ英雄豪傑たる道なりと。然れども是れ果して眞に英雄豪傑たるの道なるか、若夫れ其道此に在りとせば、甚だ善し。其道や幸にして寔に易々たり。然れども如何せん不幸にして英雄豪傑たるの道は、決して斯る易々たる道にあらざることを。然は則如何曰く余輩をして今直截に云はしめば、必ず將に云はんとす曰く、凡そ英雄豪傑たるの道は、其れ只た品性を養ふと、實力を蓄ふるとの二事に在るのみ。品性を養ふとは何ぞ。曰く克己反省本然の良心を明かにし、道義に立ち、清潔を慕ひ、汚穢を惡み、諂諛を退け、廉直に居り、公明正大を友として、詐僞反覆を敵となし、誤り易き流浴の毀譽を後にして、變はらざる天の褒貶を先となし、利己と身勝手に昧まされず、義理と人

情とを能く辨へ、勇ありて智あり、智ありて愛あり。正義を守れども慈悲を失はず、前後を顧れども因循に陷らず、柔和なれども侮るべからず、威嚴あれども猛ならず、其眠るや赤子の如く、其戯るや兒童の如し、然れども一旦事あり。奮然として起つときは。聲天地に響い、勢山嶽を崩す、譬へば獅子の如きもの、之を仰げば逾々高く之れを瞻れば逾々潔く、積雪玉を疊み、攅峯天を摩す、譬へば富岳の如きもの、度量の宏濶なる大洋の如く、膽氣の嚴毅なる泰山の如く、精神の汪溢なる大河の如きもの、總て此等の立派なる品格を養ふこと、此等の完全なる德性を脩むること、是れ卽ち英雄豪傑たる所以の道なり。然則實力を養ふとは如何。曰く實力を養ふとは勉勵刻苦博く學び深く思ひ、十分學識を蓄積すること。事に當り物に處し、臨機應變の才力を錬ること。實

際の業務に執掌して事を成遂げ得る能力を養ふこと是なりとす。識あるとも才なくんば事活動せず、才あるとも能力なくんば事敗れ易し。能力は才を得て活き、才は智識を得て動く、然れども人あり若し此實力を養ふ三要素の中、其最も必要なるものは何なりやと問はゞ、余輩は學識なりと答へんと欲す。何となれば學問しつゝある間には、才力も自ら出て、能力も自ら出ることあるを信ずればなり。

されば余が愛する希望ある有爲活潑の青年諸君よ、諸君、諸君は果して眞の英雄豪傑たらんと欲するか、須からく、此の品性を涵養せよ。此實力を育成せよ、英雄豪傑たるの道は、たゞ此品性を養ふと、此實力を蓄ふるの外又他に在るを知らざる也。世に奸雄なる者あり。此等諸品性を養はず、只だ偏局の癖性を發達せしめて、隨分目覺ましき運

動をなす。然れども記憶せよ此等は眞の英雄にあらず、若しも人類をして道徳の動物たらざらしめば、或は之を許して可なり。然れども苟も道徳の動物として視るときには、其の豪たり傑たる、適々蛇たり蠍たると一般、其力量の大なれば、大なるほど、運動の目覺しければ、目覺しきほど、益々害毒を社會に流さん。勿謂、芳名を千歳に遺す能はずんば則ち臭名を百代に流さんと、奬勵する勿れ、生きて宰相たる能はずんば則ち死して閻羅王たるべしと、宜しく鼓を鳴して之を攻めよ。吾人の望むところは、徳人に在り蛇蠍に非ず、諸君の中又謂ふ勿れ、我れ及ばずと、若し夫れ、諸君をして下等動物たらしめば則可なり。然れども苟も無窮發達の性を備ふる人と云へる中にありとせば、何ぞ自暴自棄するの理由やある。彼の襤褸を纏ひ牛馬と力を角ぶるものを見

て吾人は疑ふ。是れ尙ほ、萬物の靈長乎と、然れども退いて熟〻之れを考ふれば、是れ敢て疑ふべきにもあらず。禽獸は進步發達の性を有せず、而して人は則之を有す、若夫れ敎育其當を得、脩養其宜を得ば黑奴をしてアリストーテルたらしむること亦た必しも難きにあらず。況や諸君をや。若夫れ此に志を立て、品性を涵養し、實力を育成し、克己反省、孜々兀々怠らずんば何の難きことか是れあらん、我が阿ブラハム、倫コルンを編す、亦此微意より出るなり。來て阿ブラハム、倫コルンを觀よ。彼は卑賤なる農夫の子、學資なき一寒生、時間なき勞働者なり、然れどもワシントンと共に日月の如く米國社會の空に輝くに至りしゆゑんのものは何ぞや。其苦楚辛酸兀々汲々の間に於て、猶ほ能く德性を涵養し實力を育成したるに由らずんばあらず。嗟

呼來てアブラハム、リンコルンを觀よ眞の英雄豪傑とは卽ち彼れの如きを謂ふ也。學あり、智あり、愛あり、義あり、富嶽の如きものなり。靈獅の如きものなり。靑天の如きものなり。大海の如きものなり。而して又日月の如きものなり。其德萬世に輝き、其澤四海に溢る、則るべし、慕ふべし。余今日に感ずるところあり、聊か玆に此の傳を編す。

幼少の時代

世に完全なる人物一個もあるなし。然れども古往今來の間に於て完全に近きものは誰なるか、批評家は曰くジヨージワシントンなりと。然り、彼は剛にして能く柔、急にして能く緩、意志堅强にして才智圓活、威嚴備つて和氣溢れ、英雄的の心膽を懷いて而かも君子的の德量

を兼ね、學術的の頭腦を有して而かも國家的の觀念に富み、高尙なれども能く謙遜に、猛鷙なれども能く着實に、宗敎上より云へば敬虔の徒軍事上より云へば智勇の將、政治上より云へば眞のステーツマン、人情上より云へば卽ち慈愛深き人なりき。されば余輩はワシントンに於ては批評家の言に異なし。然れども若夫れ吾人をして完全に近き第二の人物を擧げしめなば、余輩は卽ち阿ブラハム、倫コルンを以て答へんと欲す。請ふ其の理由を縷陳せん。

阿ブラハム、倫コルンと云へば彼程の人物なり、以此人多くは其出處を知らんと欲す。然れども今や往て搜索するに、北米合衆國ケンタッキー州中にて、當時ハルデンと呼ばれたる極めて僻地の偏隅を流れたるノールン河の畔ならんとのみ聞こえて定かならず、就きて其邊を

探り見れども、今は痕跡もあらで知る人もなく、草空しく茂り、水空しく流るのみ。宜なる哉、傳へ云ふ、當時彼れの兩親は貧困極めて甚だしく、家と稱ふるほどの住居を有せず。恐らくは渾木小屋に住ひしならんと(挿圖を見よ)されば英傑阿ブラハム、倫コルンは此渾木小屋に生れたりと想像せらる。時は一千八百九年二月の十二日。=今より八十年前=恰も是れ陽時積雪融け、梅華榮に向ふの時なりけり。聞くが如くんば、父は哀れむべき雇役者にして、日々に他人の田圃に勞し、母は炊爨織縫家事の外、或は他家の洗濯に傭はれ、或は家用の採薪などして、漸く其日を送るなる、最も貧しき家族にてありけり。されば他日大統領たるべき身も、今は呱々の聲高く、背上空しく乳を求め、懷裡尙ほ寒に泣きたらん。=貧家の子弟よろしく聞て奮起せよ=斯て七

歳に至れるとき阿ブラハム、倫コルンは既に早や、父に隨て森林に入り、小腕に斧を振ひつゝ荊棘を芟り蓁莽を闢て、開墾耕作等の助手をなし、其より凡そ十年間、十七歳の半に至るまでは勞働營々、殆ど遑あることなく、或は野に出で、山に入り、或は木伐、或は耕耘、或は負し、或は擔し、此に傭し、彼に役して、所謂る純粹なる勞働社會の生活を送りたき。

但一つ茲に大幸福なりと謂ふべきは、此間大に彼の志氣を鼓舞し、彼をして昇天の希望を起さしめたる人あり。誰ぞや。曰く彼れの母卽是なり。彼母は山家の賤婦なりしかども、其性至て賢明にして、能く人生の貴き所以を知り、嘗て謂らく、人の價値は其魂に在るなり。如何に富榮に誇るとも心腐り魂迷ふ、滅亡の道の旅客なりせば、貧賤其

人より甚しきはなし。之れに反して縱令ひ身は貧賤に沈むとも、正を守り道を蹈み、天の御心を奉體しゆきなば、富榮は却て我が身にありなん。況てや人は同胞なり、兄弟なり、魂に於ては無差別なり。若し夫れ志を立て、氣を勵まし、不撓不屈の精神ありなば、爭で立身の途なからんや。アヽ我子よ母は汝が百頃の肥田を所持せんよりは、寧ろ汝が聖書一卷を所持せんことを冀ふ。＝此語は世に著名なるものなり。此母が子に於けるの志既に小ならざりしを見るべし。＝左れば手習學問は尤も汝に大切なれども、汝が家不幸窮困如此なれば、汝を學校におくると能はず。されば來れよや、母が覺えし一通を折りを窺ひ敎ふるほどに、農事の暇に學べよかしと、最と懇篤に云ひ聽かせて、先づ第一に習字を敎へ、次に聖書をもて讀書を敎へ、朝は早く起して之れ

を習はせ、夜は疲勞を忍ばせて、熱心に敎へ授けたりと云ふ。嗚呼ナポレオンの母、ガフーフヒールドの母、楠母の訓誨。孟母の三遷斷機。玆にぞ思ひ合はさるゝ。

試に往て彼の分別なきものゝ言を聽け、曰くヱ、學問ごころかや。食事にさへ困るなり。餓鬼共等何を吐露すぞ。早く行て草を苅れよと。やんぐわん聲にて怒鳴りつくるは、是れ彼の下等社會が常態に非ずや。彼等は卑屈に滿足して、復た人生の價値を知らず、紳士等と彼等との靈魂は生れながらにして異なるものと諦め、水吞百姓は代々水吞百姓と思ひ、奴隸は孫々奴隸と心得、我子の出世を願はぬのみかは、偶々鳶親鷹兒を生み、竊かに高天を睨むあらば、則ち喫驚大罵して、折角の志氣を碎くに至る。ア、何等の殘酷、何等の遺憾ぞや。然を其間に

子立して屹然高貴なる觀念を抱き、十歳にも足らぬ兒童を勵まし、終に大統領たらしむべき資性の端を開導したる此母の如きもの幾人かある、嗚呼欲有き（ありた）ものは賢母なる哉。

然るにリンコルン年僅か十歳にして、其母は溘焉として朝露に先ちて逝きけり。阿童は、天に哭し地に慟せしかども、最早や其甲斐あるとなく、晝夜嘆き悲みて、殆と寢食を絶するに至る。加ふるに貧困にして棺を購ふ資さへなければ、父子諸共に錐鑿を弄して、粗惡なる棺を造り、出棺の日には隣家二三の幇助を力に、悄々として北邙に趨き漸く埋葬を果たせしと云ふ、其憫狀察すべし。

さても右の如く、阿童は忽焉其良母を失ひしかば、今は唯々暗夜に燈を失したる心地、今更誰れにか學ぶべき、父は日々の勞働に我が子

を顧りみる暇さへなし。然しながら至誠は神を動かすとの譬に洩れず一旦母が吹き納れたる訓誨は、造次顚沛にも、彼れの心を去ることなく彼の「學問は大切なり、靈魂は價値あり、立身は志氣の如何に由る」と云へる數個の觀念は常に腦裡に跳りて止まず。＝幼時の感は一生を支配す、記す。余が五六歲の時なりし、父なる人、余を膝上に斜に抱き、余が頭髮を撫でながら、汝は何物たらんを翼ふや、父は汝をして學者たらしめんと欲す。望むらくは汝某先生（當時藩の儒者の名を呼び）の如くなり、數多の弟子を門下に集め、人の尊敬を受くる身たれよやと。兒や不肖未だ父の屬望に副ふ能はず。今なほ碌々風塵中に客遊す。然りと雖ども、廿年苦學の際、常に余が怠慢を鞭ち起すものは、實に此一言にてありしなり。＝於此乎阿童は一日恭しく其志を父に訴へ、

たとひ一年半年なりとも、願ふは小學校に通はせ玉へよと云へば、父も不憫に思ひけん。終に之を許しける。左れば、倫コルンは大に歡び是より日々九英里餘りの長路を厭はず、而かも一回の缺席をもなさで僻地なる或小學校に通ひしが、憫れにも復た貧困の爲め、僅か九ヶ月にして廢學せざる可からざる幸なき運に立ち至れり。嗟呼此九ヶ月こそ是れ倫コルンが一生の間に於て學校敎育を受けたる時間なりし、而して此二百七十日間は、嘗て彼れが學生となりたる始にして亦其終なりしと云ふ。

此よりして后、倫コルンに就き、書き來るべきものは唯倫コルンが鍬を執て田圃に立ち、復び雜草を鋤くの圖なりとす。然しながら此度は倫コルンが耕へす傍に、每に二三書卷の横はるを見ん。此れ何物ぞ

曰く此れは是れ當時倫コルンが僅かに學び得たる。「スペルリング」。「アリスメチック」「グランマー」の三書なり。從ひて家庭の學問は啻に勞役間の寠時にして、學校教育は僅か九ケ月に過ぎずと雖も、倫コルンの怜悧なる、又其精神の不撓なる、遂に能く此等三書の意義を解するを得、朝は携へて出で夕は携へて歸り、暇ある毎に、隙ある毎に、眼光を此に透射せしかば、勉强の功、つひに三書の一章一句を失はず悉く能く暗誦するに至りたり、斯て其後不思議なる機緣に由りて更に一書の加はりたるあり、何ぞや。曰く建國の父祖、萬古の人傑ジョージ、ワシントンの傳卽是なり。

彼れ一日隣家にジョージ、ワシントンの傳記あるを認めて、欲しきこと限りなし、幾度か借らんと欲して、屢々其家に至りしかども、其身

の賤しきが爲めに、人の否まんことを恐れてや、敢て之を得云はず、然れども以前の三書は、既に暗誦するほど熟讀しければ、新書もがなと、渴望する折柄、殊にかねぐ\慕ひ居る。ジョージ、ワシントンの傳と見て、逾々堪らへすなりたりけん。遂に思ひ切て、其の書を借覽せんことを請ひ出でしに、其の人惜氣なく、貸しける。於此乎倫コルンは鬼の首にても得たる心地、雀躍しつゝ携へて歸り、折角借り得たる寶書と思へば、乃ち鄭重に之れを戸棚に入れ置きたり。然るに、不幸、其夜大風雨吹き降りて、渾木小屋を搖動がせければ、倫コルンは驚き目覺めて起き上り、軈て彼の書の事を思ひ出で、アハヤ濡れては一大事と、急ぎ取り出でゝ之を見るに、コハ如何。壁隙風雨を漏して、既にサンぐ\になりゐたり。於此乎大聲を放ち風雨の荒るゝをも打忘れて

半晌斗泣きたりと云ふ。＝赤心可觀＝かくて其夜は童子心に心配して眠り得ず、翌朝に至りても尙ほ兎や角と案じたりしが、畢竟するところ正直に次第を陳べて、謝罪するに如くはなしと思ひ極め、さて彼の痛く濡れ汚て頁葉だも分かずなりけるを、震へながら兩手に擎けて隣家に持ちゆき、やがて泣きつゝ、罪を謝し、＝眞情可掬＝左る代に二日なりとも三日なりとも、余に勞役を命じ玉へ、其を以て購ひ候はんと申しければ、貸主も敢て之を尤めず、乃其意に任せける。於此乎倫コルンは終にワシントンの傳記一卷を得、乃ち家に歸りて後、その濡れ汚れて文字も分かずなりけるを鄭寧に乾し燥かし、注意して頁葉を分ち正に閱讀に差支なきものとなし、其後は晝夜の差別なく、專ら眼光を此書一卷に注ぎしかば、終に全くワシントンの品性、及び其の功業

を識認し得て、己が人物の標準を乃ちワシントンに置きたりと云ふ、時に是れ阿ブラハム、倫コルンが十三四歳の時なりける。

嗚呼阿ブラハム、倫コルンの幼時幷に、其貧困窮窶の狀や此の如し。而して其精神志望や旣に彼れの如きものあり。吾人は顧みて赧然、又奮然たらざるを得んや。

さて此如くして阿ブラハム、倫コルンは旣にワシントンの傳記一卷を得、而して爾來之れを讀むこと數十遍大に悟る所あり。謂へらく、彼も人なり我も人なり。若夫黽勉奮勵せば、我とても如何ぞ彼に及ばざることやあると、乃ち行住より坐臥に至る迄、ワシントンの品性と、其事業とを忘るゝことなく、只管彼れの如く淸くなり、彼の如く正くなり、彼の如く動き、又彼の如く止まらんことを熱願したり。此に於

て乎精神の赴く所、遂に能く其理想的の人物に感薰せられ、幼少ながらも自らか溫良篤實の風采を備へ、自由の爲め、國家の爲め、義の爲め、又貧弱者の爲め、後日大に盡す所あらんと欲するの志望を奮起せしむるに至りたり。

斯て其後に至りて、又た大に阿ブラハム、倫コルンの性質を變化せしめたる所の二書ありき。何ぞや曰く一はイソップ物語にして、一は天路歷程卽ち是れなり。余輩は如何にして倫コルンが此等の二書を得たるかを知らず。唯だ聞く、彼はイソップ物語を得て、之れを讀み、亦た大に悟る所あり、謂へらく、志氣の誠實是れ固より希望せざるべからず。自由の爲め義の爲めに盡すこと是れ固より忘るべからず。然れども世上氾濫の情海に入り、紛絲亂麻の境遇に處し、能く遊刀恢々

の技倆を展べんと欲せば、才氣又尤も必要なり。智力又決して輕んず可らず。今此のイソップ物語は、諧謔の妙、人をして殆ご頤を解かしむるものあり。然れども能く其眞意のある所を味へば、諷刺適切、人をして又儼然襟を正して端坐せしむるものあつて存するなり。嗚呼是れなる哉。此れなり、ワシントンは我が性行と志氣との師たれよ、而してイソップは我が才力と智能との師たれよ、彼れ捨つべからず、此れ欠くべからずと。是に於て乎ィソップ物語を讀むと、宛も前きにワシントンの傳記を讀みしが如く、幾十遍となく之れを讀み、之れを諳んじ、遂に之れを應用して、巧みに奇話を案出し、最も面白く之れを語り、人をして亦往々頤を解かしめ、忽ち翻て又儼然襟を正さしむるの妙術を得るに至りたりと云ふ。而して天路歴程を得たるは其後の事

なり。彼れ既にワシントン傳記を得て巳が品性を形造し、イソップ物語を得て己が才氣の運用を學び、斯て專ら此二書のみを讀みつゝある間に、人あり、天路歷程を與へて讀ましむ。倫コルン何氣なく之を見るに、一の宗教小說なり。然れども彼のマコレーが、「歐洲十七世紀の世界に於て、眞正に文學家と稱せらるべき者は、獨りミルトンとバンヤンあるのみ」と稱したる、其有名なるジョン、バンヤンの作に係るのみならず、實に其のバンヤンが一々我が身に經歷したる實際實境を簡到の筆と誠意の熱血とを以て、面白く小說的に、書き出したる名編なれば讀むに隨ふて感益々深くなり、謂へらく、ア、我が身や未だ人生の大海に浮かばず、浮世の旅の大道に上らず、然れども、人生は、眞に如ク此ものたるべく、浮世は實に斯くの如きものたるべし。いでや此の書を

繰り返へし、又繰り返へして、以つて我が一生の案内記たらしめんものをと、其れよりして之れを讀むこと更に以前の二書と異ならず。於此乎、彼れをして又大に此の天路歷程に感薰せらるゝものとならしめ、其爲人に大影響を及ぼさしめ、遂に彼れをしてワシントンの品格とイソップの才氣を備へしむるの外、尙ほ彼れをして、非常なる意志を堅立せしめ、忍耐不拔の精神を推起せしめ、加ふるに又彼れをして永遠無究の大觀念を開かしめ、超然脫俗、心胸宏恢、安命養性、宇内濶步の人物たらしむるに至りたり。

論者或は云はん、阿ブラハム、倫コルンは、僅々九ケ月の敎育を受くるに止まりしに非ずや。如何してか、能く此等の三書を解し得しぞや。況や其之れを讀んで、如何なる感を起したりとか、或は又た如何なる

想を起したりなんぞと云ふに至りては、全く杜撰の說たるのみ、無學の少年何ぞ能く此處に至らんや、畢竟彼れが他日非常の人物となりし所以のものは、他に境遇の然らしむるもの有て存するならんと。然れども、余輩を以て之を觀れば、其論こそ杜撰たれ、凡そ人生の運命なるものは、多く少年の志氣如何に在て變ずるものなり。幼時の覺悟如何に由て轉ずるものなり。されば來りて先づ阿ブラハム、倫コルンの性行を觀よ、縱ひ彼は貧賤なりしにもせよ。既に彼れの如き母を持てり。既に彼の如き庭訓を受けたり。既に彼の如き志望を抱けり、而して既に又彼れが如きの勉强力を有したり。縱ひ就學の時間は短かゝりしにもせよ。其れ只だ彼れが如き、刻苦奮勵以て不撓の精神を運用したるの實跡あるを見る。又何ぞ數年の間を期して、尙ほ後の三書等を解し

能はざるの理由やある。又其感想を起し能はざるの理由やある。されば余輩は此に一話を拈出し、敢て以て論者の疑塊を解かん。

一客あり、一農家に宿し、深更偶々起て厠に往く、火光あり、一線暗樹の間より閃出し來る、驚いて謂へらく、是れ果して何物ぞと。因て往て之を窺ふに、火光は裏坊の連房より出づ。於此乎、怪む事益々甚しく、拔き足差し足しつゝ、就て其の內を覗きみれば、此れなん一の書燈にして、傍に一少年あり、靑草を籍いて坐し、目光烱々、一書を見詰めて。振り向きもせず、更に人の來るをも知らず、方に勉學の最中なりき。嗚呼讀者は之れを誰れとか思ふ。此れぞ是れ阿ブラハム倫コルンが幼時に於ける天下有名なる一話に非ずや。去れば客人は之れを見て愕然たること稍々久しく、其夜は其儘引き返へし、さて翌朝

に至るに及んで、急ぎ之を家の主人に質せしに、主人も亦た感嘆、卽ち答へて曰く、彼れは我が家の奴僕なり。晝は田圃に出で、寸隙を得れば輙ち書を繙き、夜は夜業を終て後、更深ける迄書を閲し、文字あるものに遇へば則ち問學を試み、學問性行上の談話を聞けば、則ち欣々然喜び以て食を忘る。其身は奴僕に過ぎずと雖も、鬱として大志を抱くものゝ如し。然り而して凡そ人の大志を抱くもの若しくは學問に志すものは、往々、職事を怠るの弊あるを免れず、苟も然らざれば傲慢に流れ、口角牙あり。主を輕んじ、人を侮り、使役に便ならざるを常とす。然れども獨り彼の少年に至りては、毫頭かゝる癖習を見ず。職業に勉むるや、人に倍し、其從順恭謙なる、生意氣青年の比に非ず。而して其の正直にして潔白なる、其質朴にして忠義なる、其快活にして

筋力を惜まざる、其敬虔にして表裏なき、其勇氣ありて情愛ある、其才智ありて敏捷なる、其他愛すべく、感ずべく、賞すべく、賴母敷き諸々の美性が、日夜油然彼れの心胸に生長しつゝあるの實を認むるに於ては、我一家男女の感嘆措く能はざる所、誠に彼れは良僕よと、竊かに誇り語りたりと云ふ。嗚呼々々虎は生れながらにして已に呑牛の氣象を有し、栴檀は嫩葉より已に香氣を帶ぶるとかや。阿ブラハム、倫コルンの如き者は、夫れ唯だ虎兒たるべし。夫れ唯だ栴葉たるべし。天資稟質固より凡俗ならざりしならん。然れども熟々今日より彼が性行を覗へば、彼の三書即ちワシントン、バンヤン、イソップの性行に類する者多きは何ぞや。其彼が高潔にして自由を好み、聖武にして善く國に盡したる行跡は、乃ち、ワシントンに類するに非ずや。其快活

にして機敏なる、諧謔にして奇警なりしは、乃ちイソップに類するに非ずや。然り而して其山河を事ともせず、行路難を患とせず。意志を奮ひ、健脚を固め、毀譽褒貶を顧りみず、長蛇哮獅を懼れもせず、信仰の鎗を提げ、正理の楯を鎧ひ、一直線に進み進んで、遂にその大目的を達し、而かも其氣の落々浩々、脫俗高尙なるものあるに至ては、乃ち是れ天路歷程の主人公、彼のクリスチャンに類するに非ずや。要するに阿ブラハム、倫コルンなるものは卽ちワシントン、イソップ、幷にバンヤンの三位一體物と稱して可なり。然則ち知る可きのみ、阿ブラハム、倫コルンの爲人や。方に彼の少年の時、方に彼の奴僕の時、方に彼の三卷の書に眼睛を注ぎ、心思を凝らしたるの時に於て、廼ち鑄陶造化せられたる者なることを。換言すれば、其の爲人や全く彼の三書

に薫化せられたるに由る。天資固より算外に非ず。雖然世に若し三書なかりせば、余輩は知らず、倫氏の性行が、如何に變化し行きたるかを若夫れ彼れに賢母なく、若夫れ彼れに師表なく、若夫れ彼れに勉勵心なくんば、余輩は信ず、彼れ亦た終に牧童村豎の伍たらん事を。謂ふと勿れ、我れ及ばずと。謂ふと勿れ、我れ其人に非ずと。凡そ人生の運命なるものは、唯だ幼時の覺悟如何に由て變ずるものなり。嗚呼吾人は既に倫コルンが其倫コルンと爲りたるの順序を知る。其手段を知る。其秘訣を知る、而して其順序、其手段、其秘訣、今尙現に指掌の下に在り。諸君取て進めよ、用ひて往けよ。又何ぞ自暴自棄の愚を學ばんや。

尙又阿氏が幼少の時代の中に云ひおくべきこと二三項あり。何ぞや。曰く阿童が尙ほも八九歳許のときとかや。阿氏の家族等は生活の爲め

に驅逐せられて、故郷なるケンタッキーを立去りて、遠くインデアナへ移住せしが、當時阿氏の家族等は、例の貧窮の故を以て、多くもあらぬ家財なれども、通運に附するの力なきより、悉皆之を荷車に載せ、阿父が前を引けば阿童は之が後を推し、斯て路なき處に出て會へば、斧斤を揮て荊棘を闢き、宿なき山野に日を暮せば、枯枝を焚て夜を明かし難に難を重ね、險に險を冒しつゝ、泣々旅したることありと云ふ。是れ其一にして、以て阿童が貧困話中に加ふべく。次には彼が十三四歲の頃或は旅籠屋に雇はれて暫く子守の役をとりしことありしが、恰も苦學の折からなりければ、片手に小兒の搖籃を動かしながら、片手に例の書物を開き、右手に兒輩を推しながら、左手に文字を暗誦し、大に傍人を驚かしたることありしと云ふ。是即其第二にして以て阿童が精神話中

に入るゝに足るべし。然而して玆に尤も奇警なる一話あり。何ぞや、曰く此は是れ彼がインデアナへ移りて席未だ暖たまらざる時の事なりき。彼れ一日端艇をミシ、ツピー河濱に繫で以て汽船に乘り移る客を待つ、偶々二人の紳士あり、岸上「シガ」を吹きつゝ來る。彼れ乃ち端艇より走り出で大聲を揚て呼て曰く。紳士よ〳〵瀛船へ乘移り玉ふならば、あはれ我が端艇にてこそ召させ玉へよと。紳士は笑ひながら頓て來り近きしが躊躇もなさで乘てける。されば阿童は大に喜び、いそぎ汗を流しつゝ彼等を瀛船にまで送り屆けしに、彼等は如何したりけん艇代をも拂はずして、其まゝづか〳〵と瀛船へ上りゆかんとす。阿童は之を見て大に驚き、あはてゝ彼等を呼び留めたれども、更に顧みる樣子なく、みる〳〵甲板上に登りゆきたり。於此乎失望落膽。不覺聲を

放て泣きゐたりしに、須臾にして其の客の一人此方を指して歸り來り、やがて歩を止め俯して端艇を見下すよとみえしが、忽ちポツケツトより五十錢の銀貨を取り出で、其れ之れを取らすぞとて、投げ與へてける。されば阿童は之れを見て復た大に喜び、直に其の客を仰ぎ見ながら、涙を拂ふて禮を述べたり。然れども當時渡船の價、一人僅かに五六錢に値するものなるを、今や客の投げたるは正しく五十錢の銀貨なれば、釣錢を數へ返すに困じ果て、乃ち再び紳士を拜し、願くは小貨を給はれかし、小錢の持合なきものをと、呼ばはりければ、紳士は莞爾と打笑みて、釣錢などは返すに及ばず、皆取らすぞと云ふ。阿童は於此益々喜び、滿面に笑を含みながら、幾度となく感謝を述べ、やがて引返さんとしたりけるに、此の質朴なる風態にや感じけん。又他の一

人の客出で來りて、同じく五十錢の銀貨を取り出でつゝ、余も亦た之を取らすぞ、皆取て行けと、云て投げ與へ、其儘平然として去りゆきしとぞ。

ア、是れ眞に阿氏が幼少なる時代の憫狀と、又其率直性とを善く顯はすものと謂つべし。之を聞く阿氏は大統領たりし後、嘗て屢々友人に向ひて、此時の感情を物語り、余は一生中に彼時ほど嬉しく感せし事は罕なりき。今こそ思へば可笑しくもあれ、彼の時には恰も天下を取りしが如き心地せりと云ひしとなん。

嗟乎當時誰か能く此一童舟子が後日の大統領たるべきを知らんや。然れども彼は遂に鳳翥龍變したり。畏るべきは人なる哉。否。畏るべきは寧ろ人の覺悟と精神なる哉。

青年の時代

去るほどに阿ブラハム、倫コルンは今は早や青年の時代となりたり。而して其青年の時代の劈頭に於て、吾人が聞くところのものは、彼が十九歳の時、インデアナよりニウオーリンス迄貿易船の舟子となりてミシシッピーの大河を航せしことなり。彼れ當時未だ航海上の經驗なかりし、然れども何事かあらんとて、たゞ一人の青年を俱しながら、大膽にも乘り出でたり。かくて數日の後、彼れ或る河港に錠泊せしに、一夕七人の黒奴あり、銃劍を提げて突入し來り、阿氏等二人を劫かして船中の貨物を奪はんと試みたれば、阿氏は大棍棒をおつとつて起ち上り、即坐に一人を擊ち倒せしに、殘れる賊は、其勇猛にや恐れけん、皆あはて

ふためき逃げ去りたりとぞ。＝膽力想ふべし＝
其後一千八百三十年卽彼が廿一歳の時、父幷に異母弟等と共にインデアナよりイリノヰ州なるサンガモン河の畔に移り、茲に曠野の開墾に從事する中、其年の冬より翌年に渉り、大雪降りしきて、寒氣また凌ぎかたく、牛馬の凍死するもの數を知らず、三ヶ月間全く太陽を見ること能はず、道路閉塞して人行絶え、家々食物を得るに窮して、將に餓死に瀕せんとす。然れども誰あつて進んで供給の道を開かんとするものもなかりし時に、阿ブラハム倫コルン獨り奮然として起つて曰くたとひ如何に雪降ればとて、たとひ如何に雪積めばとて、坐して死を待つことやはあるとて、＝義氣事に臨んで煥發す＝、乃ち異母弟と共に雪を衝てサンガモン河の畔に出で、茲に一舟を得て之に打ち乘り、

封ずる氷を無理に碎き行き、遂に他市より必要品を運輸し來り、大に村民の益を謀りたり。加ふるに此邊は隣家とは云へ、曠野中の僻村なるを以て、孰づれも皆三丁四丁若くば五丁十丁相隔たり。疎々落々たるものなりければ、其間大雪を開いて此が道を造らんには、大に力を致さゞるを得ず。然れども倫コルンは之を物ともせず、能く斡旋の勞を執り、殆んど其身の危險をも忘れたるが如くなりし。於此乎、村中皆其勞を賞し、又大に其德を感じ、阿氏の名始て其近傍に嘖々稱道せらる。

其後二年、彼の黑鷹土人の亂起る。於レ此乎阿ブラハム、倫コルン義勇兵となつて出陣せしに、陣中彼れの勇畧を稱揚する者あり。乃ち拔んでられて士官となる。唯夫れ服役僅か三ケ月にして事全く鎮定に歸し

其まゝ解職を命ぜられしを以て、左まで目ざましき軍功を奏することあたはざりしと雖ども、然れども其間また頗る盡したるところありたりけん。其賞典として一小土地を受領するに至りたれば、爾來始めて生計に累はされざることを得て、間もなく郵便局を肇めたり。蓋し此の郵便局を肇めたる、別に他志あるに非ず。彼れ此時に至るまで、常に文字に眼光を注ぎ、天下の政治、經濟若しくは社會の出來事等に廣く心思をよせしかども、身の赤貧なると勞働に閑暇なきとの故を以て書籍又は高等の新聞、雜誌なんどを購讀する能はず。僅かに餘光を人に借り、間を得て時々之を閲みし居る程の生活なりしに、今や賞典地を領したるが爲めに、少しく生氣を吹くの餘地を得たれば、乃ち勞働の事を止め、聊か軍役中に蓄へたる金額を便りに、玆に郵便の局を設け

ば、一は以て一身を糊するに足るべく、一は以て新聞、雜誌なんどを集むるの機會と並に之を閲讀するの時間とを得べしと。早くも此に氣付きければ、乃ち此職を肇めたるなり＝大志燃へて益々熄まず。＝然れ共此の所謂郵便局たるや規模甚だ狹陋にて、云ふも哀れなる話のみ多かりき。先づ其郵便受には直に彼れの帽子を用ひ、主人も受附も時としては又配達も皆主人公一人にて之を取扱ひたりと傳ふるほど、其れほど哀れなる郵便局にてありし。斯て一年餘を經て後、或友人の勸めに從ひ、郵便局を閉ぢて測量家となり、處々を廻りて該業に從事する中、其の人物漸く世上に顯はれ來り、此年卽一千八百三十四年恰も彼が廿五歲のとき、遂に大多數の投票を以てサンガモン郡の議員に擧けられ、續いて法律を研究し、其後卽ち一千八百三十六年の秋、遂に代言

人の免許を得、翌年スプリングフヒールドに移り、直に代言の業を開きしに、辯才と云ひ、議論といひ、品格と云ひ、一も間然するところなき眞正の人物たることを證せしを以て、老狀師輩までも皆舌を捲き後世畏るべしとて、驚嘆措くこと能はざりしと、＝己に冲天の翼を張れり＝

又倫コルンが義俠心と勇氣とに關して、茲に痛快なる一話あり。恰も彼が廿六七歲、卽ち代言の職を執り、漸く政界に突入せんと欲する時なりとかや。イリノキ州に一女子あり。「サンガモン」雜誌の紙上に於て、匿名もて、何事か地方の政黨を非議するの際、當時政界に跳梁せる將軍シールドの行爲に對し、少しく嘲笑の筆を舞はしたることありける。蓋し將軍シールドは頗る好名貪利の癖あり。奴隸廢否の議論

においては、常に阿氏等の反對に立ち、而かも善からぬ人なりけるが之を見て大に怒り、直に往て「サンガモン」雜誌の記者を執へ、怒顏決眦、罵て曰、嗚呼豎子何者ぞ、敢て不禮の投書を採錄し、能くこそ余れを嘲弄したれ、余れ今汝に血鬪を申込まんとて來れり。汝速に準備せよ。汝血鬪を懼るゝか、然らば寄書者の姓名を云へ、汝寄書者の姓名を顯はすこと能はざるか、罪責全く汝が身に在り。余れ今汝が生命を要むと、記者聽て震慄す。然れども寄書家は女子なり。義之を露はすこと能はず、因て猶豫を請ふて曰く、願はくは暫く余を赦るし玉へよ。余今より廿四時間の後、必ず左右を君に報ぜんと、シールド諾す。然れども汝逃ること勿れと附言せり。於此乎記者は卽ち一室に籠り、晝夜寢ねず、以て逃路の策を案ず。然ざれも竟に之を得ること能はず

時針忽々約期將に去らんとす。於此乎益々困迫爲すところを知らず、輙ち慌忙自失青氣を吐て坐す。面色土の如し、偶々倫コルン入り來り、之を見て怪んで曰く。君何すれば異狀あるやと。記者告ぐるに實を以てす。倫コルン曰く、敢て憂ふること勿れ。往てシールドに云へ、寄書者は卽ち倫コルンなりと。記者聽て默して答へず。蓋し禍の阿氏に移らんとを恐れてなり。折柄履聲廊上に鳴る、記者が曰く、是れ必ずシールドならんと、倫コルン避く、而してシールド來る。卽ち記者を睨して曰く、約期既に去る。汝寄書者の姓名を云ふか、但しは血鬪に應ずるか、二者速に其一に居れ、最早猶豫すべきにあらずと。怒髮冠を衝いて立つ。其貌鬼の如し。記者は元來怯弱の人なり。之を聽て戰身振顫、覺えず倫コルンの名を以て答ふ、シールド卽去。於此乎直に血鬪

狀を倫コルンに通じ、武器は廣刄の劍、場所はミシ、ツピー河中なる一小無人島、時期は某日某時と報ず、倫コルン皆之を諾し、其日其時に及んで其の場に到り、而して蓁棘を闢き、荒蕪を平げ、已に戰地を設けて待つ、シールドは之を知らず。此日心に惟へらく、彼の奴能く何事をかなさんや。余れは將軍武を以て立つもの、彼れは賤者の子、辯を賣て口を糊するもの、思ふに恐懼措く能はず、方に遁亡竄避したらん。我此行や、必ず無益の勞たるべし、莫遮、彼我已に約す、余れ若し今にして行かずんば、恐らくは後日怯名を負はんと、乃ち約時に晩るゝと數十分、而して到る。倫コルンは遙かにシールドの來るを見て、卽ちと大聲に呼はつて曰く、將軍來る、何ぞ遲きや。既に約に晩るゝと數十分なり。余れかく已に戰場を闢き、君を待つこと良久し。速かに來りて

勝負を決せよと。直に用意の大劍を振ひ、二王立にぞ立つたりける。將軍シールドは之を見て心膽頓みに碎け去り、暫く茫然としてたゝずみぬ。時にジョン、ハーデンと云へる人ありけり。此人は後日南北戰爭の際、擢んでられて將軍となり、屢々戰功を奏し、終に殉國の榮死を遂げし有名なる勇者なりしが、此の時仄かに兩人の血鬪ある由を聞き、急ぎ輕舟を飛ばせて來りて見れば、今や兩人各々廣刄の大劍を提げ、將に相向はんとする時なりき。於此乎大に驚き、直に兩人の間に入り、笑ふて曰く公等有髯の大人、何ぞ兒戯を試むるやと、輙ち兩人を制止したり。

聞く阿ブラハム、倫コルン嘗て人に語て曰く、我一生の大過罪は卽ち血鬪に應ぜしとなり。余れは之を思ふ毎に未だ嘗て謙遜の念を生せ

ずんばあらざるなりと。編者曰く然り、其れ或は大過罪たるべし。然れども余輩は彼れが所謂る大過罪の中に於てすら、尙且つ彼れが任俠と勇膽との美性を觀る、彼の行或は則るべきにあらざらん。然れども此の勇氣豈亦た大に慕ふべきものあるにあらずや。

嗟呼讀者諸君よ、彼の七歲の時早や父に從ふて南畝に事し、八九歲の時賢母の膝下に庭訓を受け、十歲の時、日々九英里の土を踏んで通學し、九ケ月にして之を廢し、十二三歲のとき、ワシントン傳、イソップ物語、天路歷程、三書の爲めに大感化を得、其後十九歲までの間に於ては、萬種の境遇を跋涉し、而かも毅然として精神撓まず。昂然として意志屈せず、刻心苦學、眼は半夜の燈に耀き、步武は千古の英傑を追ひ、只管文物に思念を込め、十九歲より廿三歲の間に於ては、

勇略を以て聲名を興し、義氣を以て世人を驚ろかし、品格を以て衆望を博し、遂に一郡の議員に擧げられ、日ならず法律を研究して、代言人となり、同業者を壓し、老狀師を挫き、人をして其後に瞠若たらしむるに至りたる、此阿ブラハム、倫コルンが半生の傳記は、卽ち我等が立身に於ける生命の書とも、光明の燈とも、金科とも玉條とも、稱すべき、無上無比の寶典に非ずや。嗟呼我等盍ぞ奮起其後へに從ふことを學ばざる。

其の容貌

別紙に寫したる、肖像を觀よ、額は濶くして智あるが如く、唇は堅閉して決心性を現はし、頰は落ちて賢明質を示し、眉は愁ふるに似た

りと雖ども亦豁然たるところあるが如く、眼は凹みて鋭しと雖ども何となく慈愛を含みて、時々滑稽を洩すが如く、風采は裝はず、體裁は飾らず、擧動は疎なるが如くみゆると雖ども、亦謹直なる所があるが如く、容貌は甚だ揚らずと雖も、何處となく高貴なるところあるが如く、身の丈六尺四寸少しく瘦せたるに似たりと雖ども、四方を睥睨して立つときには、昂として孤鶴が鷄群の中に在るが如し。若し夫れ此頭腦に宿るところの神魂の如何に至りては、吾人尙ほ之れを順次に說かん。

其智辯

阿ブラハム、倫コルンが非常なる辯舌家たりしとは、世に隱れなき

事實なり。彼は唯だ議論體、討論體に於て雄辯の聞え高かりしのみならず。其談話體、敍事體、形容體、想像體に於て、尤も妙を得たりと云ふ。去れば彼れが未だ雇奴たりしとき、到所必ず、常に近隣の兒童に好れ、慕はれ、纒繞せられたり。そは彼れが屢々兒童に面白き談話をきかすことあるを以てなり。啻に面白き談話をきかすのみならず。其の性快活、能く戯むるゝことあるを以てなり。蓋し其の天質によるべしと雖も、察する所、亦た彼れが能く例のイソップ物語に薫化せられたる效驗ならん乎。然れども彼れは徒らに詼諧を事とする者に非ず。必ずや其中に道德の妙味を包むを常とす。例令へば或時夫婦相共に旅行することありしが、到る處に人民群集して氏の演説を乞ふと。日に幾回なるを知らず。彼大に困す。然れども人を失望せしむると能はざる彼

の性質は無理にも其請求を容れ來りしに、遂に精盡き氣耗して、今は演說と聞てさへ殆ど怵惕をなすに至れり。而して或一夕の事なりき。彼疲勞の餘り甚しきが爲め、斷じて其請求に應ぜざらんと定めたりしに、衆は之を聽き容るべくも非ずして、曰く、既に幾千の聽衆堂に滿てり、是非共一席簡短の演說をと切に迫つて止まざりき。若し頑剛のものなりせば、斷して無情に附し去るべきも、流石慈愛深き倫コルンは此に至て止むを得ず頓に一策を案出し、左らばとて、起て演壇に登りしが、其登るとき竊かに妻君を招き寄せ、軈て夫婦諸共に公衆の前に現出したり。公衆は一大拍手喝采して後、靜まりかへりて見てあるに、其の妻君は、例に因りて、演壇の傍へに坐せんともせず、仍倫コルンと共に壇上に直立したり。去れば如何なる次第ぞと訝る中に、倫

コルンは首を擧て、聽衆を見廻はし、靜に口を開て曰、嗚呼諸君よ諸君の厚意感謝に堪へず。然れども余の體鐵に非ず、我が魂大能に非ず、日々夜々の厚意の爲めに身魂將に壞れんとす。今夕の演説實以て盛望に副ふ能はざるなり。然れども諸君よ、見るべし、我妻を見るべし。如斯く其れ短かし＝倫コルン夫婦は有名なる不平衡にして妻君は其の丈甚だ低く阿氏の半身にだも達せざる程なりしと＝而して予を見よ此くの如く其れ長し。是卽ち今夕我が演説の長短なりとて、其儘笑つて降壇せしかば、聽衆も亦大に笑ひ、大拍手大喝采にて、更に其所爲を怪恐する者もなく、反て心地よけに散會したりと云ふ。

彼れ又イリノイ州に議員たりし時、議場に一人の能辯家ありて常に彼の敵手たり。一日餘りに我が言語をのみ駁擊し續けて、殆んと惡意

地に見えしかば彼又一策を案出し、やがて議場に起て一話說を構造して曰、アヽ滿堂の諸君よ、請ふ我れに一奇談のあるを聽けよ、我が隣家に某氏あり。頗る鐵砲を好み、鳥を見ては擊ち、獸を見ては擊ち、つひには無益のものまでも擊ちつゞけ、唯擊つことをのみ事とせしが、一日のことなりき。朝早く起きて庭園に出でしに、樹間に栗鼠の座するを見たり。すはこそ得たれと喜びつ、矢庭に鐵砲を持ち來り、狙ひ定めて一聲ドーと發彈したり。然れども其栗鼠落ちもせず去りもせず。依然として猶其の處に在るが如し。あら仕損じたり殘念やと思ふ程に再び込み替へ狙ひ定めて、又發彈したれども、彼れ猶依々然として、彼處に在り。是に於て乎大に怪み、驚きながら眺め居りしに、家兄あり、傍より問て曰く、家父何を擊しや、何なるやと。彼れ怒て曰、汝彼の

栗鼠を見ざるや、其れ其處にぞと。例の樹間を指示せども、家兒は更に之を見ること能はず。眞面目に之を疑ひしかば、彼れ遂に歩み近き、目を拭ふて能々視れば、今迄栗鼠と思ひしもの、忽ち消滅し去て跡方もなし。乃ち茫然として自失し、黯然として自ら顧みれば、朝早く起て未だ洗面もせざりければ、己が目の上にある瘤を認めて全く栗鼠と心得たるによりしとぞ。

斯く語り終りて直に椅子に坐しければ、滿堂の笑聲沸くが如く、而してかの敵手は其後全く彼れに攻擊を試むることを止めたりと云ふ。

阿ブラハム。倫コルンが快活にして、能く戯謔し、質朴にして飾らず、純然たる平民的人物たりしことは前章に於て、既に其一斑を示したり。然れども一方より之れを觀れば、彼は又非常に眞面目なる人にて

ありし、心配多き人にてありし、硬意豪膽の人にてありし、至誠慷慨の人にてありし、或人は評して曰く彼が演說の人を動す所以のものは全く彼れが至誠なるに在りと、或人は又評して曰く、彼れの意志の強硬なる恰も鬪犬の一噬の如し。一たび狙て嚙みつけば手足を斷絕せらるとも又放たずと、其他彼れがドグラスと論戰したる時の勇氣を觀よ。又彼が敵軍の中に昂立して嗟呼我れはヒウマニチーの敵となつて生きんよりは寧ろ其友と爲て死せんことを希ふと、豪も動かず。大喝したる大膽を觀よ。彼れは決して唯純なる詼談浮膽家にては非ざりし、其時に戯れ、時に謔け、婦人にも、子供にも、老人にも、青年にも、英雄にも、學者にも、何れの社會に入り、何れの人に交るとも、能くCommon Sense 人情を解し居て、自然と萬境に適合したる所以のもの

は、適以て彼れが完全なる人格たりしを證はすのみ、往いて彼の不完全なる人間を觀よ。面白き人物は相談相手になりがたく、諧謔の人は至誠の事を談ずるに足らず、意志の强きものは、頑固にして、膽の剛きものは、暴戾多く、至誠を唱ふる者は快味を有せず、心配多きものは、鬱散を知らず、各一方に偏居して、一は羽毛の如く、一は錘鉛の如く、飛ぶものは飛揚し、沈むものは沈潛す。是れ弱き人類の通患なりとす。然れども倫コルンは之を兼ねたり。戯るゝ中にも、至誠を忘れず、赤子の如く淡白なる中にも、複雜なる才力を有し、强き中にも優しきあり、柔かなる中にも剛きあり、馴れ易くして侮るべからず。親み易くして輕んじ難し。去れば此處に猶ほ一二其の例證たるべき妙談奇話あり。讀んで其眞味のある所を翫索せよ。

倫コルン嘗て代言人たりし時、一夕スプリング、ヒールドより徒歩歸宅す。會々足疲れて行くと能はず、往來の馬車は鞭を擧げて走ると雖、當時貧困の身、殊に生憎一錢も齎らす所なければ、之に乘らんとを欲すれども乘ると能はず、去ればとて前途猶遠し。身體殆んど困頓して、徒に杖を路上に立てつゝ、往來の馬車を眺め居りしに、忽ち又一策を案出したり。乃ち手を擧げ聲を放つて、今來る一馬車を呼び留めて、やがて之れに走り近き、其中に坐し居たる富裕らしき一紳士に向ひ、揖一揖して陳じて曰く、生はこれスプリング、ヒールドの某なり。生大膽君に請ふ所あり、君若し生が無禮を咎め賜はずんば、幸に我がこの外套を其處迄携へ往て給らずやと。時方に嚴冬寒風凛たり、紳士驚いて曰く事甚だ易し、唯恐る汝の寒に堪えざらんことを。倫コ

ルン答へて曰く我豈に寒を患んや。我れは則ち君に托し行く其の外套中に居るものなるをと。是に於て車中の客皆之を聞いて大に笑ふ。紳士も亦倫コルンを面白き人物とや思ひけん。事皆承知す、去れば預り行かんとて、乃ち倫コルンの手を引き車に乘らしめ、行々相語て益々其人となりを愛敬し、遂に互に無二の親友となりしとなん。

又南北戰爭の起頭に當て倫コルンは合衆軍の元帥として某將軍を撰定し、速かに出陣すべき旨を令したり。然れども其元帥兎角に躊躇遷延して出陣せんず模樣もなく、倫コルン嚴しく之を督責すれば、其將對へて曰く、我れに兵士少なし、願はくは更に數千の兵を與へよと。乃ち數千の兵を增し、再び其出陣を促すに、其將又對へて曰く兵尙ほ足らず、願はくは更に加ふるに數千の兵を以てせよと。倫コルンは此

時殆んど其亡狀に堪へざりしかども、猶ほ全局の爲めに之を忍び、再び、義勇兵を徵集して更に數千の兵を加へたり。然れども彼れ尙ほ出陣せんず模樣なし。南軍大擧して將さに來り迫らんとするの警報あり。然れども彼れ猶之に應ずるの計畫を爲さず、是に於て平北部の人民は伎癢に耐えず、其の元帥を責むるの餘り、施いて之を擧げたる倫コルンを非難し、將さに大事に及ばんとす。此に於て倫コルンは斷然彼れが職を剝ぎ、直に使をグランドに馳せ、乃ち之れを一室に引き語て曰く「今日卿を招く他あるに非ず、我が卿を信ずるの深き、將に大任を以て卿に托せんと欲す。然れども之に先ち此に一話の語るべきあり。偖ても一日天下の獵類二手に分れて、大合戰を始めたるとありたりしが、一方にて誰れを元帥たらしむべきやの問題起り、やがて評議

して遂に一老猴を其の職に撰擧したり、然れども其の猴其の職に就きながら更に進擊の用意をなさず、群獸怪みて之を促せば、猴答へて曰く顧みれば我が尾甚だ短し、之を延ばす工夫なくんば吾出陣をば得こそせまじと云ふ。於レ是群獸大に心配し、各々己が尾を切て之れを元帥猴の尾に續てける、然るに彼れ又顧みて曰く、此れ尙ほ短かし、願はくは更に之を增せと。於レ是群獸只だ其機嫌を損せざらんことを是れ務め、又相謀りて、再び以前の如くに續尾せり、然れとも彼れ猶ほ動かず、益々長尾を要したり。於此乎群獸益々惶惑焦躁して再三再四に尾を續で引延ばせしかば、其尾遂に元帥猴の肩に載せ、頸に纏ひ、身體の周圍に捲きしかども其端尙ほ餘りて室中に蜿蜒たりし。左ればイザ是よりと、乃ち起たんとしてけるに、其尾の餘りに重きが爲めに其儘起つ

こと能はず、兎角するうち敵軍長驅襲ひ來りて、全軍終に敗滅に會ひし』と猶ほも語を繼て言はんとせしとき、グランド乃ち嚴然襟を正して倫コルンが口を掩ふて曰く、公復言ふと勿れ余不肖と雖も旣に公の意を諒す。余は決して新兵を乞はざるべしと。遂に元帥職を拜して出でしが、果して其後其の言を食まず、グランドは一回だも新兵を大統領に乞ふとなかりしと云ふ。

一方より之れを觀れば倫コルンは戲れたる妄言をなしたるが如し、然れどもグランドは嚴然襟を正して之を聽けり、何となれば其諧謔の一話の中には無量の感慨を含めばなり。倫コルンは其記臆し易き奇談の中に己が烈火の心情を込めたり、而てグランドは其心情を聞て其獸談を聞かざりし、若し夫れ尋常の人なりせば、倫コルンを以て眞實心

なき駄洒落ものゝ亞流となし、之を聽て怒るべし。何となれば天下危急の時に當りて、而かも大任を授くるに當りて、猶ほ諧謔を吐くを見ればなり。然れどもグランドには此の諧謔こそ眞に雲霆の如く響きたるなれ、常式の辭令よりは幾萬倍の力を以て强く彼れを襲ひたり。余常に思ふ。彼の膝栗毛の諸謔の中にも、細に心情を叩き來れば、天道と人生とに於る、一種無量の感慨を含み居て、裏面には正しく悲淚の漣々たるを見ると。彼の皮相の判斷者は共に倶に語るに足らず。小人は大人を論ずるを能はざるなり、即ち阿ブラハム、倫コルンが諧謔の如きは適々以て彼れが完全なる人生の資質を具へたるを表するものなり、而して之が爲に更に至誠と正確とを傷くることなく、却て剛柔相和し快鬱相伴ふ、眞個の驚歎すべき德性を有したる人豪たるを證するに

足るものと謂ふべし。讀者亦た能く心して人物の判斷を誤ること勿れ。

以上述べ來りたる所に據て、之を觀れば、倫コルンが辯、倫コルンが智、又倫コルンが快活にして、愛すべき性を備へたることや明かなり。然れども猶ほ彼れが演說に就て之を云んに、倫コルンが當時第一流の能辯家たりし所以のものは、第一彼が論法の明晰なるにあり。彼れは輕々しく濁流に手を下さず、靜かに立て其澄めるを待ち、明かに水底を鑑み、而て其論點を取り擧ぐるを常とす。彼れの論法は連鎖の如し。能く連絡して離れず。切り入るべき處なし、其譬喩は普通の現象を取り、其言語は多くサクソンを用ひ、其の辯法は單純なり。之を以て能く人の肺腑に透徹し、其一たび落下し來るときには、恰もダマスカスの劍光の閃き來る如く肉飛び骨斷つ、其徐々として攻擊し來る時は、恰

も鋏椎を以て楔子を心胸に打ち込むが如し。彼れは辯を飾らず、威嚇の語を用ゐず、學者の如く學術より幇助を借らず、只其の長ずる所は自然なり。其譬喩は萬有より集む、此の故に新鮮なり。彼れは能辯學を修めたることなし。然れどもライマン、ビーチョルが嘗て能辯法を問ふたる學生に答へて、汝先づ汝の論旨を充分に自得せよ。其餘は自然をして自然に働かしめよと、敎へたるが、即ち能辯學の神訣なりとせば、彼れは正しく其能辯學を修めたりと云ふべし。彼れの議論は枝葉少なく、只一直路に進むを常とす。此の故に其力大なり。恰も蒸滊機關が雷擊して直線鋏路を驅け來るが如し、而て之に逆ふ異端邪說は宛ながら兒童が戲れに置く鐵道上の小針の如し、一擊下に平匾なる片板となる。彼れの容貌は至誠を以て溢れ、彼れの眼は愛情を以て輝き、

彼れの胸は、虚飾を惡み、僞善を惡み、詭辯を惡み、壓制を惡み、不正を惡み、而して凡て人民を悉く同胞兄弟と見做し、之れに幸福を與へ、之れに自由を與へ、之れをして益々喜ばしめ、之れをして益々進ましめんと欲するの熱情にて燃ゆ、私利を計らず、派心を挾まず。思想は常に誠實と伴ひ、議論は常に本心に從ふ。此故に苟も心あるものヒウマニチーの友たるものは、其演說を聞きつゝある間に、全く彼れと同情になり、同感になり、終に彼れに伴ふて、ヒウマニチーの路に出で馳驅奔走の勞を取らんと欲するの義心と志望とを奮起せしむるに至る。嗚呼其德其辯豈亦偉ならずや。

其德行

阿ブラハム、倫コルンは慈悲と愛情とに充ち、虚構を惡み、僞善を擯け、唯天眞を保たんことを之れ勉め、至て明白に淡純に率直に總て平民的に進退擧動したる人なりとす。されば紳士の交際社會より之を云へば、更に稱すべきところなく、寧ろ疎漫にして無作法なる人なりしと雖も、其天眞爛熳として、滿腔の誠情應對に發し、慈悲相憐の至性自ら口辯に溢れ、恰も春陽の積雪を溶かすが如き和氣あるに至りては衆をして斯く云はしめたり。曰く彼は職人の體に天使の魂を蓄ふものなりと。

茲に南北戰爭の最中に當りて一人の婦人ありけり。其夫軍律を犯して將に死刑に處せられんとす。婦悲嘆の情やる方なく、如何にもして夫を救ひ出さんものをと。狂氣の如くになり、赤子を抱きながら、太

統領館の前まで馳せ行きたり。然れども當時公用私用打交せて、大統領の面謁を請ふもの、日夜門前市をなせば、三日三夜立ちつゞけしかども、更に間を請ふべき便を得ず、さればとて夫の死刑もます〳〵期日に近き來れば心いよ〳〵あせるがまゝに、四日目の夜に至りて、竊かに案内を待たず、戸を押し開て、館内に入り、大統領の過ぎらるゝこともやあらんと。或一室に扣へたり。倫コルンは斯ることはつゆ知らず。劇務につかるゝまゝに、暫時庭園を逍遙せんと。廊下をつたひて出で來りしに、赤子の呱々と啼く聲す、思ひ掛なきことなれば、驚きながら僕を呼びて、赤子の聲す何者ぞと尋ぬれば、其僕ゆきて、事の顛末を聽き質し、やがて其由復命すれば、倫コルン直にそれ召せとて乃ち其婦人を自己の室に伴れ來り、哀訴の件々聽き居りけるに、如何

にも情に堪へずやありけん。落涙堰きあへず、遂に泣て赦免状を認めやりしと云ふ。

又倫コルン嘗て急事あり。いそぎ馳せつゝ某處を過ぎしに、見れば一豚大溝に轉じ、半身泥に埋沒しながら、天を仰で叫喚するありけり因て立ち止まりて、之を援けんと欲するに、溝廣くして且つ深く、徒手竟に奈何ともするを能はざりし、於此乎忸怩として去り、又行くと二英里餘、惻怛の心終に忍び難く、乃ち踵を回らせて馳せ歸り來り、傍家に請ふて木板を得、之を投じて泥中に降り、遂に窮豚を援ひ擧げ新衣を汚泥に染めながら、其儘又々馳せ行きしと云ふ。

又聞く彼れが大統領たる四年間は、即ち彼が心情の優美にして、慈悲愛善に滿ちたるを證したるものなりと、彼はかつて快活にして善く

諸謔せり。然ども當時彼れの心は悲哀と痛苦とを以て滿たされ、殆と破裂せんとせり。彼は考へ企て祈り且つ働きづめにき、何となれば敵の進擊、我軍の難澁、負傷者の喚く聲、戰死人の斃るゝ樣、嫠の悲嘆孤兒の慘狀等は晝夜彼がやさしき心情を壓し來りて、彼を懊殺すればなり。彼はフレデリッキボルクの敗報を聞きしとき、大聲に叫んで曰く、嗚呼世に我より多く悲しきものあるか、あらば我其人を憐れむを知ると、又當時フランク、ビー、カーペンタルと云へる畵工あり、偶々數ケ月間大統領館の内に留り、倫コルンと同居したりしが、彼れ後日人に語て曰はく、余は多年夥多人間の相を研究せしが、未だ倫コルンの如き面の人を見ず、倫コルンは我嘗て見たる悲哀の顏の最上の手本なり、余屢々彼れが悲泣の態を見しが、其容貌は、實に彼れの最も烈しき敵

をしてすら、尙ほ爲めに淚を流がさしむるに足るものありき。余一日細き鄕下に於て彼を見しが、其手は彼れの後に在り、其頭は彼の胸に低れ、重く深く寄せたる皺は彼の目の下に集りて、前夜睡らざりしことを現はせり。斯樣なる悲哀の類の圖は、余が未だ曾て見ざるところなりと云々。

世に量見違のもの多し。元は天眞爛熳、純潔耿介なる眞男子にして、平民の味方、貧人の友、ヒウマニチーの辯護者たりしも、其漸くに地位の進むに從ひ、忽ち體裁を作り始め、平民的のものは貴族的となり厚謹の者も傲慢となり、業と風采を麗かにし、故らに容貌を嚴かめしくし、己が利益を獲得すべき者若しくは高位の者の來るあらば、則ち匍匐笑して迎ふれども、若し夫れ之に反するものは、縱令ひ以前の朋

友故舊なるとも、縱令ひ以前の恩人なるとも、無情斷つて之に接せず若しくは數十分玄關に待たせて後に之に接し、而かもどこから來たと言はぬばかりに之を冷遇す。是れ俗物社會の常體なり。彼等は思ふ。體裁を作りて、偉く構ゆるは、是れ偉くなるの方法なりと。是れ威德を附るの手段なり。是れ地位を保つの秘訣なりと。而して日々に品性の墮落して、竟に眞正男子の擯斥爪彈を招くを知らず、嘆すべき哉。

此等のもの、暫時は俗人を驚かすことを得べし。人工の瞞着法を以て暫時は俗界に威嚴を保つことを得べし。然れども、元來人の德望なるものは、品性に在り、其品性既に腐る矣。德望豈に久しく持すべけんや。其德望既に失す矣。體裁の裝飾、容貌の作爲、亦た何の用をかなさん。

適々以て人に嘲笑せらるゝ資料たるのみ。而して世間今日此等の者甚だ多きを見る。悲哉。彼の高帽を峨らかにし、勲章を閃めかし、肥馬を走らせ往來を叱咤して來るものあれば、人見て竦懼敬拜す。何故に竦懼敬拜するか。高帽あるが爲か、曰く高帽は西洋小間物屋に推積してあり。然れども人の之を竦懼するを見ず。然則勲章か。曰く勲章は製造人多く之を有す。然れども人の之を敬拜するを見ず。然則肥馬か隆車か曰く肥馬は伯樂之を有し、隆車は職工主之を蓄ふ。然れども人の之を竦懼敬拜するを見ざるなり。然則知るべきなり。人の之を竦懼敬拜するゆえんのものは、決して體裁的の装飾虚品に非ずして、全く其人物の價値如何に在ることを。さればたとひ高帽を戴き、肥馬を躍らせて威張るとも、苟も其人に非ざらんか。吾人の之を視る、恰も猕猴面

冠者を見ると一般のみ。然るを世人之を察せず、猥りに高帽肥馬を敬拜す。即ち徒に布や紙や金や木や禽獸に德望を與ふ。惑へるも亦甚しからずや。

阿ブラハム、倫コルンを觀るべし。彼は下賤より身を起して、終に大統領に昇りしものなり。然れども彼は始終依然たる平民なりし、彼は常に人工的なる貴賤上下の區別を輕じて、寧ろ天爵的なる品性上人物上の價値を重んじ、其一生の大願は自由と幸福とを人間の限れる階級に止めず、之を空氣の如く水の如く、一般人民に普及せしめんと欲するに在りし、人間の階級には更に頓着するとなく、唯同胞と云へる觀念の上に總ての人類を一視したり。こゝを以て如何に其地位の昇進し行くとも、曾て一回も其德望威嚴を保たんが爲めに、體裁を飾り優

豪く構ゆる如き窠臼には陷らざりし。則ち體裁を飾り優豪く構ゆることなしと雖ども、而かも彼の威嚴と德望とは、終に天日の如く耀けり彼れの德は、內、內閣を固結せしめ、たとひ大困難の中に在りしも、異論分裂の惧あらしめず。外、外國を威服せしめたり。乃ち英國の如きは窃かに南米の推挽をなし、南米の爲めに軍艦を造るを諾し、既にアラマバ艦等を差し向けたることなどありしこ雖ども、倫コルンの德は能く、公使アダムスをして美事に其干涉を解かしめたりし。されば彼のヘンリー、ワルド、ビーチャルが戰爭の最中に於て英國に乘り込み、北米の爲めに旋天動地の演說をなせしときにも、阿ブラハム。倫コルンとさへ云へば、賞揚せざるものなく、倫コルン萬歲と叫ぶの聲々は、每に聽衆より湧き出でたり、乃ち知る。眞正の德望威嚴なるものは、

決して飾るより生せず。構ゆるより出でず、全く其の人物の眞價に出て生出し來るものたるを、然るを俗人之を知らず。イヤに構へ込み、妙に飾り立て、而して只管ら紳士たるの資格を失はざらんことを是れ務む。此等の人、官にも民にも甚だ多し。笑止千萬。

若又た彼れが慈悲心と、又その潔白の行爲とに至りても、今の人之を見て我身に省みて可なり。或は保護と云ひ、授産と云ふ。其名頗る美なり。然れども其金や眞に下民を愛するより出でたるか、何ぞ其往々曖昧として二三會社の餌食たるもの多きや。或は國家の爲めに盡すと云ひ、或は人民の爲めに謀ると云ふ、其言や頗る壯なり。然れども何ぞ往々國と民との名義の下に私慾の橫行して而魑魅の出沒するを容るゝ多きや。聞く阿ブラハム、倫コルンは甞て郵便局に從事せしとき

多く公金を預りしも嘗て一錢だも私用せず。たとひ貧困に沈むとありしも、更に之れを融通せず、後に勘定の時來りしとき、卽はち悉く封印のまゝにて之れを納め、人をして其潔白なるに驚かしめたりと。知らず、今之を聞て恥るものはなきか。阿ブラハム、倫コルンは凹凸たる頰間に多く悲哀の線を引かしめ、一戰爭のある每に、慟天哭地、民の不幸を悲しめり。彼れは大統領の榮職に居ながらも、相憐の情に襲はれて、天下我より多く悲むものあるかと叫び、畫工をして悲みの面の最上の手本を撮しめたり。知らず、我國貴顯の士、省みて赧然たるところなきか。彼の別莊は巍然として茅草の民屋を壓下して建ち、彼の駟馬車は人民を叱咤して來往す。然れども知らずや。此の叱咤せらるゝ人民は、卽ち駟馬車の金主にして、而して彼の壓下せらるゝ民屋

は、卽ち別莊費の出處たることを。嗚呼氏等が阿ブラハム、倫コルンを慕ふ、また故なきにあらざるなり。

其宗教

阿氏は基督敎信者たりしに相違なし。然れども其何派に屬したるかを尋ぬる時には、漠として據る所なきが如し。或は彼をメソデスト派に屬したりと云ひ、或は其妻君の長老派に屬したるを以て、彼れを其派に入るゝものありと雖も、元來宗派には至て淡白なる人にてありければ、惟ふに何れの宗派に於ても、彼を我物なりと托大（いひまへ）するを能はざるべし。

彼は天父の神を信じたり。彼れ南北戰爭終局の後、卽一千八百六十

四年十月廿日大統領の資格を以て、全國に感謝會の布告を出せしが、其文に曰く嗚呼我等をして宜く天父に向ひ、總て今日まで、此困難の日月の間、人民を家族の内に守り、兵士を陣營の外に桿き給ひしとを、宜しく膝を屈して感謝せしめよと云々。

彼又た聖靈を信じたり。乃ち第二なる感謝會布告の文に曰く、願くば聖靈の神、人民の心に降りて、之を柔らげ、殺氣を解かしめ、彼等をして皆な靜謐なる平和なる幸福なる民たらしめよと云々。

聖書については彼れかく云へり。曰く天下之れより貴きものはなし神が人間に與へ給ひし物の中にて、最も貴重なるものは即是なりと。

人或は疑て曰く彼は政略上より、宗教を信じたるにはあらざるかと噫是れ何ぞ言の謬れるや。阿氏の如き至誠僞りなき人物が如何にして

假面を裝ひ人を謾するを得んや、況んや、阿氏が幼少の時より薫陶せられたる書籍の一は、卽ち正しく聖書なるに非ずや。殊に彼れは其演說中、眞面目に天帝の正義を說き、其大統領に擧げらるゝときも、己れの弱きを知るところより、惟り神に由て立んと誓ひ、其戰爭中は只管天父を信じて、始て安心平和を得たりと云ふなるをや。

茲に一話あり。ニユヨルク五角街なる教會に、或る日曜の朝、丈高き一紳士入り來れり。彼れ暫く會堂の周圍を見廻して後、やがて日曜學校兒童の集り學びつゝある傍にゆき、喜ばしげに眺め居るゆゑ、教師は奇なる事に之を思ひて、試に彼に向ひ何か兒童に話もかなと請ひみてければ、彼れ否む色なく、心安く諾ひて、やがて教話を始めけり。然るに其話方の上手なる、其の談柄の面白さ、えもゝ云はれず。兒童等

始め、果ては教師まで、皆な其の話に醉ふたる如くなりけるとき、やがて時間來りければ彼れソコ〳〵にして去らんとす。然れども兒童等は彼をおさへ、更に一話よ〳〵と迫り〳〵て、彼を放たず。彼れ大に困じ、漸々の事にすかしこしらへつゝ、あはてゝ走り出んとす。其時教師等は送りて其勞を謝し、試に彼れの姓名を尋ぬれば、彼れ平氣の面貌にて、我はアブラハム、リンコルンと云ふものなりと答て、振り向きもせず行き去りけるとぞ。

かく阿ブラハム、倫コルンは頗る兒童を愛し、最も日曜學校を教ゆることを好み、諸處に於て之を受持ちたりしと云ふ。而て今其の常に兒童に教へたりと云へる戒語を掲ぐれば左の如し。

ア、兒童よ

飲む勿れ　（酒）　喫ふ勿れ　（莨）

詈る勿れ。　詐る勿れ。

博奕する勿れ。　僻む勿れ。

汝の侶を愛せよ。眞理を愛せよ。德を愛せよ。

而して一生幸福にてあれよ。

然り而して玆に又た阿氏が眞實赤心より宗敎上の疑問を起したる一話あり。乃ち阿氏の友人たりしカーペンタル氏の傳ふる所に據れば、玆に熱心の基督敎徒なる一貴孃あり、同じく、阿氏の友たりしが、一日阿氏と宗敎上の談話をなしけるとき、阿氏遽然として容を端して、竊かに問を起して曰はく、貴孃の實驗に據れば、眞に甦りたる徵證とは、果して如何と。孃の曰はく眞に甦りたる徵證とは誠に己れの罪を

知り、心底よりキリストの救を望む、是れならんと。阿氏聞て暫く默せしが、やがて莞爾として應へて曰く嗚呼左れば余も亦幸に眞に基督の信者たるべし。殊更吾は我子ウヰリーの死せしとき、孃の云へる如きことを感ずるの情に堪へざりしと。

政治の時代（上）

さても前述の次第にして阿ブラハム、倫コルンは、暫しが間憐れなる郵便局の主人たりし。然れども彼は其間に夥多の新聞雜誌等を日々閱覽するの機會を得たるを以て、漸く時事を知るものとなり、從て政治の思想始て彼が腦底に湧き出せり。されば其の後間もなく郵便局を罷めて、測量事業に移りたりしも、彼れの耳目は常に社會の出來事に

傾き、天下の時勢は常に彼の圖大心を衝動して止まず。於此乎、彼れ一日思惟へらく、余や田舍の一匹夫のみ。然れども嘗て聞く、事は精神に成る。精神にして旣に在焉。古今の英雄何ぞ必ずしも庶幾すべからざるあらんや。母訓も實に玆に在りし、余が十年の辛酸苦學も亦實に玆に在らずや、顧みれば今や我國內外多事、英の遺恨未だ全く晴れざるあり。魯佛の關係未だ全く解けざるあり。戰亂の餘毒未だ消せず黎民の疲弊未だ復せず、加ふるに奴隷の議論今や益々殺氣を帶び、將に一大破裂を來さんとす。實に是れ危急存亡の秋に非ずや。然るに余彼の合衆黨なるものを觀るに、大活眼を社會の上に開くことを知らず、利己の以て自由となし、暴戾を以て恩德となし、一州を知て一國を知らず、一家を知て一州を知らず、頻りに不正の奴隷論を主張し、妄に

國家の分裂を謀る、嗟余や不肖と雖ども、愛國の情誰れにか之れ如かざらん、豈能はずとして止むべけんやと。乃大に奮發するところあり於是乎遂に大志を起して法律を研究せんことを決定せり。

かくて倫コルン既に法律を研究せんことを決定す。然れども田舎測量仲間の一寒生なりければ、其の書類を購ふことを得ず。於此乎一計を案じ、友人の紹介を得て、ツイ近傍なる或る代言の事務所に至りて、其志の程を述べ、辛ふじて其書を借るの約を結ぶを得たり。然れども其約束たるや、聞くも哀れの次第にて、事務所の開る間は彼等が引用を要するを以て其閉るに及んで之を借り、其開くるに先つて之を返し、朝夕通ひつゝ漸く借讀を得たるなりとぞ。其苦心と其忍耐亦感ずべきものあるにあらずや。然れども倫コルンの勉強力は、遂に此の不便困

難に打勝て上進し、未た二年ならざるに、既に一廉の法律家となり、人をして驚舌を巻かしめたり。

其より二年の後、倫コルンが甫めて廿三歳の時、即一千八百三十二年に及んで倫コルンは遂に衆人の推すところとなり。Whig（ホイッグ）黨より撰出する、イリノヰ州議員の候補者たるに至りたり。蓋し察するところ當時倫コルンは既に法律をも研究して、政治の思想も益々發達し來りたれば、時時郷黨朋友なんどと、時事を談論し、古今の商較などするに烱眼天荒を破り、雄辯風雷を起すの力量を顯はすが上に、其人物の正確にして而かも才氣ある、其性質の溫雅にして而かも剛毅なる、彼れが天眞の磁石力は必ずや人心を吸引して彼の周圍に集めたるならん。

Whig黨とは當時政黨の一にて保護貿易と內國改良等を主張し、力を中央政府に致さんとするものなり。此黨ブッチュマンの大統領たらんとするとき、即ち一千八百五十七年に二分して、一は Knowing Nothing (其意何をも知らぬ)即ちアメリカン黨(外國の關渉を拒むより出づ)に合し、一は Free Soil Democrat (奴隷を拒む合衆黨)と合したり而して此第二の黨は其後共和黨となりたるものにて、當時倫コルンは頗る此が組織に盡力したりし、而して此より後政黨と云へば全く共和合衆の二黨となり、一は奴隷廢止若しくは此が制限を主張し、一は一個人の自由を主張し、分權を主張し、各州の間に奴隷を伴ふことを務めたるを以て、遂に南北の大戰爭となりたるなり。

かくて倫コルンは衆人の推すところとなり、遂に州議員の候補者たることを承諾したることは、したるものゝ、當時候補者は競爭場裡の習慣として、敵黨の候補者と立合演説をなし、公衆の前に於て、其主義と力量とを戰はさゞるを得ず。然るに倫コルンは之を可笑しき事に思ひたりしか。但しは又功名心の薄かりしが爲めか、其演場も既に定り、其

聽衆も既に集り、敵黨の候補者は既に滔々と長演說を終りし後、さていよ〳〵倫コルンの順番となりしに、倫コルンは只だ兀然と起ちながら「ア、我が崇敬する紳士市友よ、余は信ず、諸君は既に余が誰たるを知らん、余は卑きアブラハム、リンコルンなり。余は友人の勸めに由り、州議員の候補者となりて、今此に立てり。余は簡略に我が政治上の意見を云ふことを得べし、余は國立銀行を賛成す、(國立銀行とは當時政治上の大問題にて中央政府が之に與ると、民間の自由に任すとの大議論ありしものなり)余は內國改良を賛成す、余は保護貿易を賛成す、而して是れ我が主義と心なり。余若し撰ばるれば則ち諸君の己を知るを感謝せん、若夫れ撰ばれずんば、則ち余は元のまゝなる余たるのみ」と一分時足らぬ中に之を演じ終り、やがて其まゝ椅子に坐した

り。されば友人も聽衆も敵も味方も事の餘りに意表なるに驚き、互に面を見合すのみ、大に失望したりければ、此期の戰は卒に倫コルンの敗績に歸したり。然ども倫コルンは更に之を意ともせず、神氣平日の如くなりし。斯て一千八百三十四年卽ち其後二年、同じく議員改選の期に及んで、又撰ばれて、候補者となりしが、這回は大多數の投票を以てイリノヰ州の議院に入り、其より四期卽ち八年間、引き續きて復撰せられ、聲望ます〳〵高かりしが、終に思ふところありとて、州議員を辭し、其より專ら代言の事務に鞅掌したり。

抑々倫コルンが議員たる此の八年間は、實に其の立身の角石なりし彼は此八年間に於て、非常なる議論家たることを世に顯はせり。彼は議院に入りてより、二三年の後、旣にホイグ黨の指導者となり、壇場獨

歩の勢を以て、縦横無碍に舌戰し、ホイグ黨の主義を以て、鐵道、教育、治水、銀行、其他内國改良の事業を擴張したり。而して當時猛烈なる奴隷事件の議論に至ては、最も全力をこめし所、一千八百卅六年公論往々行はれず、合衆黨の邪説が毎に議院を支配するを見て、慷慨の情禁ずる能はず、乃ち議員たる資格を以て新聞に投書し、大に輿論を動したることありし。加之彼が議員たる此八年間に於て、最も著名なる出來事は、彼がドグラスと劇論強辯したることなりとす。此のドグラスと云へるは倫コルンより後るゝ二年、始て議院に入りしが、直に倫コルンの反對黨即ち合衆黨の首領となりたるものにて、倫コルンよりは若年、軀も亦た低し。然れども當時彼れは "Little Giant" 即ち「小さき巨人」と呼ばれて、猛獅の如き人物なりし。其聲は鐘の如く、其眼は

鷲の如く、其容貌は美はしく、其議論劍の如し。倫コルンは毎に其敵手たりし、而して最も奇と稱すべきは倫コルンが終始彼と鬪を解かず戰ひしとなりとす。啻にイリノヰ州の議院に於てのみならず。其國會議員を爭ふに於ても、其大統領を爭ふに於ても、彼は毎に倫コルンと旗鼓相見しなり。されば倫コルンと云へば人必ずドグラスを伴想し、ドグラスと云へば人必ず倫コルンを伴想するものとなり。而して終に各其勢力を全國の社會に得るに當てや、一時、合衆黨と云へばドグラス必ず之に伴ひ、共和黨と云へば、リンコルン必ず之に伴ふものとなり、畢竟一千八百六十年、大統領撰擧の勝敗までは、兩黨の戰は全く二氏の戰なりしなり。

嗚呼余が敬愛する青年諸君よ。今や諸君は阿ブラハム、倫コルンが

初て政界に乘り入りたる順序と、又其力を政界に致せし模樣とを聞けり。果して如何なる感慨やある。夫れ阿ブラハム、倫コルンは、本と是れ勞働者の一貧子のみ。或は入て子守となり、或は出でゝ草刈となり或はミシシッピーに艇を漕ぎ、或は山野に樵薪の勞を執り、或は義勇隊の一兵となり、或は郵便局の扱となり、或は測量組の雇となり、或は撰擧場裡の敗卒となり、轉遷流落、殆ど數ふべからざるものあり。然而して終に議員となり、黨領となり、而て天下を爭ふの元將となりたり。其成功の訣果して何れにか在る。曰く之を知る難きに非ず、余輩を以て之を視れば彼が成功の秘訣は、

先づ第一彼が立志と決意に在るなり。後嘗て母訓に頼て大に悟るところあり。謂らく萬民は同胞なり、靈魂に價値あり、爵錄重からず、

天命重し、余や貧家の一子のみ。然りと雖ども、若夫れ志を立て氣を勵し、不撓不屈の精神ありなば爭で立身の途なからんやと、意志確然早く既に決す。是れ最も肝要なるところなりとす。何となれば、立志と決意とは卽ち運命開發の起頭立身出世の角石たればなり。試にかの世にありふれたる碌々碌々たる俗輩を觀よ。彼等は靈魂の價値と運命無窮の理とを知らず、徒に自暴自棄の鄕に流蕩して、唯之れ動物慾を滿すをのみ畢生の志望となす。其禽獸と伍して終る、固より分のみ、敢て怪むに足らざるなり。

第二は彼が精神と忍耐とに在るなり。世には志を立て意を決するもの尠からず、然れども其往々にして沮喪挫折するもの多きは何ぞや、未だ其精神の欠乏と忍耐の不足とに由らずんばあらず。蓋し阿ブラハ

ム、倫コルンほど學問時間の少きものはあらざりし。又其運命の不遇なるものはあらざりし、然れども彼れの精神は子守の間にも、草刈の間にも、艇漕ぐ間にも、戰爭の間にも、常に學問の時間を見出しつゝ一口として讀書を廢したることなかりしと云ふ。顧みれば彼れは廿二歲のとき既に州議員の候補者に擧げられたり。たとひ當時十分の學力あらざりしにもせよ、彼れは既に法律を研究し居たり。既に時事の問題を解するものとなり居たり。卽ち當時少くとも彼は議員に撰擧せらるゝほどの學力を有し居たるに相違なからん。世に妄想を抱くものあり惟へらく、學校に入らずんば學問成り難しと。於此乎百方其途を求め之を求めて得ざるときには、則ち失望落膽又惟へらく、人世百事卒に成り難しと。於此乎學問を顧みず、徒らに光陰を消し去て、復た自ら

勉むるを知らず。此黨の人宜しく倫コルンを視て耻ぢ悟るところ無かるべからず、阿ブラハム、倫コルンは學校に在る日たる淺し。其勞働社會に在る寸暇猶之を得るに難し。然れども彼れが精神の不撓なると彼が不斷の勉强とは遂に不幸の運命に打勝ち、廿二歳の曉には、早や彼をして榮譽ある議員の職に上らしめたり。諺曰く間斷なき勤勉力は能く山海を移翻すと。

第三は彼が品性の善良高潔なるに在り。聞く彼は決して詐僞の言行をなさゞりしと。卽ち Earnest Abe (正直アブ) なる語は、當時殆ご鄕黨の諺となりしほど、其れほど、彼れは正直なるものにてありし。蓋し勞働社會なるものは、常に飲酒に耽り、往々醉酗して醒者を苦しましむるものなり。然れども阿ブラハム、倫コルンは飲酒は固より、喫

煙だもなさゞりし、況して放蕩などに於てをや。是れ最も彼が遂に人の信任を博したるゆゑんなるべし。又彼は勇氣と共に愛情に滿ち、人に好かるゝ性質を有したりし。精神固より肝要なり、正直固より大切なり、然れども俗に所謂る木片以て鼻頭を拭ふ如き委曲なき頑直人たらんには、其德望の如何未だ容易に知るべからず。德望の如何旣に知るべからず、成功豈亦た必すべけんや。

余故に曰く、阿ブラハム、倫コルンが立身の秘訣なるものは、卽ち彼が決意と精神と及び其品性の上に在りと。否、凡て人生成功の秘訣なるものは卽ち全く此に在りと。

代言の時代

倫コルンが代言の免許を得たるは、一千八百卅六年、イリノヰ州議員となりてより二年の後にて。其齢二十七歳の時なりし。彼れは免許を得て直にサンガモンよりスプリングフヒルドに移る、蓋し其職業の便を計りてなり。彼れサンガモンに在りしときは、知己頗る多かりしを以て、窮乏を免れ來たりしも、さてスプリングフヒールドに至りて看板を掲げ玄關を構へて、始て開業してみれば、入費の意外に夥多なるが上に、人の信用いまだ屬せず。非常に困苦を極めたりしとぞ。意ふに彼れが諧謔を以て馬車を素乘りしたる一奇談も、郵便官の譴責に遇ひ、大に親友を惱めし一話も恐らくは移轉直後の出來事なるべし。然りと雖ども桃李の花ある處その下必らず蹊をなす。美性の宿するところ人必ず憐を爲す。阿ブラハム、倫コルンをして孤德子立の境に沈

吟せしめしは、誠に霎時の間なりし。其天眞の爛熳たる其心意の高潔なる、其議論の正確なる、其才氣の銳敏なる、間もなく人の知るところとなり。開業以來二年の後には其の聲名隆然已に世に廣まれり。

一千八百三十九年。客あり、一事件を依賴し來たる倫コルン之を見るに、一時三萬圓の正金を要するの事件なりけり。乃ち問て曰く子三萬圓の正金を所持するや、彼答へて曰く否、倫コルンが曰く然らば則ち來れ、余れ子が爲めに周施すべしとて、直に伴ふて銀行に至り、知己なる役員に其由を告げ、暫時の借用を申出でしに、其役員證文をも要せず、輙ち直に貸し與へたり。客之を見て大に驚き、人の信用を得るに此に至るかと、一大嘆聲を發せしと云ふ。

ア、當今世に翩々たる代言社會の人物を觀よ。此を以て彼に比すれ

ば蓋し烏鷺も啻ならざるなり。彼等は思ふ、譎騙僞詐は以て能く幸運福利を招くべしと。何ぞ知らん、信用は百事利運の基礎にして、正直は即ち萬古最良の長策たることを。近眼も亦甚い哉。

阿ブラハム、倫コルンは法廷に於て嘗て一回だも詭辯を弄したることなし。己が訴訟の不當を發見するときには口を鍼して復た辯論せず。唯だ其の適當なる判決に出でんことを注意するのみ、彼れは議論の一端を見ず、常に其兩端を叩く。此故に判官の云はんと欲するところは、彼れ先づ知て之を陳べ、常に判官をして又云ふところなからしめたり啻に裁判所に於てのみならず、其政治上の議論に於ても、彼は決して極端を云はず、充分彼我の議論を衡り、讓るべきところは十分に讓り只だ其讓るべからざるところに堅立するを常とす。此故に人初めは彼

を侮る。然れども其いよ〳〵讓るべからざるところに迫るに至れば、卽ち背水の軍の如く、突進奮擊、搏虎屠龍の勇を振ふ、こゝを以て人始て其畏るべき論客たるを知りしとなん。

彼は貧困者の爲めに屢々義侠の訴訟を起し、枉屈せらるゝものあるときには自ら好んで辯護の勞をとり、强を挫き逆を斥くるを任となし奴隷訴訟事件の如きは尤も喜んで之に當り、彼の有名なるネンス黑奴の辯護を引受け、之をして遂に自由の身たらしめ、從てイリノヰ州中に奴隷の賣買を禁ぜしむるに至りたる國家問題の大事件の如きは、其中最も重大著名なるものなり。

玆に有名なる、一奇談あり倫コルンが嘗て法律を硏究しつゝありしときの事とかや。一日一農夫の家に入り、余は法律を硏究するものなり

然れども身貧にして學資なし、願くは余をして此の學校を卒るまで、暫時食客たらしめよと。家の主人をアームストロングと云ふ倫コルンが質朴誠實なる態を見て、大に之を憫察し、家族の中に加へて給養したりければ、倫コルンは大に喜び、其より此の家に食客となり、法律學校へ日々通學せしとありしと云ふ。

然るに程經て後、倫コルンは既に著名なる代言人となり、アームストロングは病死して、其子のアームストロングの代となりしが、彼れ次第に零落して、今は孀婦(やもめ)の母と諸共に勞働社會の賤民となり、細き煙を立て居たりしに、一夕仲間の集會に臨み、酒をも飲み、歌をも謡ひなどしつゝ、相共に興じ合へる中に、勞働社會の事にしあれば、大喧嘩を始むる者ありて、終に一人を毆殺したりける。然るに之を殺せ

しもの、罪の己れに歸するを恐れ、乃ち卽坐にアームストロングを執へて曰く、ア、汝は殺人者なり、余れ汝が殺すを見たれば、卽ち證人となりて訴ふべしとて、やがてアームストロングを訴へける。さればアームストロングは直に捕縛せられて入牢し、翌日法廷に引出されしが、元來氣弱き性質なれば、身體震ひ、唇舌澁りて更に辯解することも能はざりし。於此乎證人等はます〳〵地を得て、弱に乘じ、虛證を構へ、利辯を振ひ、喋々毒網を張り列ねたりしかば、可憐、アームストロングは殆ど罪に陷りて、又如何ともすること能はざるに至れり。

此時阿ブラハム、倫コルンは新聞によりて之を知り、熟々思案をめぐらすに、是れ或は舊恩あるアームストロングにてはあらざるかの疑問頻りに起りければ、早速旅裝を整へ、急ぎ行いて之を探ぐるに、果

して其人なりければ、大に驚き、直に其母の許に至り、舊恩を謝し併せて來意を告げければ、母は夢かと斗に大に喜び、地に躍りて、我儕（わなみ）の一子は知らるゝ通り、性質（うまれつい）の氣弱者、手荒き事すら、得爲さゞるものを、況いでや人を殺すなどとは、夢にも信じはべらねど、其の氣弱ゆゑに畏れて辯舌兎角にうちこもれば、不都合のみの應答して、我と我手を罪に援く、其口惜さ、切齒さは傍に聞く身も張り裂く思ひ、さればとて老ぬる婦の身を以て、出でゝ救ん術もなければ、只一隅に泣き仆れて神の冥助を祈るのみ、誰れか辯護の方樣をとも、思はざるにはあらねども、昔時に變る今の有樣、朝な暮なの糧食にさへ迫まる我身の如何でかは、名ある狀師を願はるべき、よしや願ひ出たりとも誰かは肯ひ給ふべき、アゝ、淺間敷の人心、たとひ猥藉し酒宴さて、夥多

集へる場所にし待べれば、我子の人を殺さぬを慥に目擊知るもの、一人二人はあるべきを、關係合を怒れてや、知らぬ顔なるうたてさよ。今更怨むにあらねども、今朝しも人の噂して、最早や證據も十分ゆゑに、明日か明後日の二日には、絞罪の宣告あるべきぞと、他人事なればロ輕く、互に細言く有樣を、此方に見もし聞もして、子よりも先きに絞めらるゝ、母の喉元息氣三寸、絕えよ諸共にと、大抵は諦めはべるぞかし、と且つ云ひ且つ泣き、殆ど絕望の體にみえしかば、倫コルンは其氣を勵まし、老婆よ左のみ絕望なし賜ひぞ、若も誠に罪ありなば、曲げて辯護する術なけれど、余れ熟々考ふるに、余れは久しく共に住居て、よく〳〵其性を知りつるが、人を殺すの人にはあらず、必定是は惡人が己が非を塗る奸策なるべし、されば暫く余に任かせて其

吉左右を待ち賜へ、昔時の御恩にむくゆべきぞと、慰めやれば、老婆はたへえず、嬉涙に漾よひて、其まゝ瞠と伏し仆れ、暫時が間泣き入りしとぞ。

されば倫コルンは其日直にアームストロングが辯護の旨を申出で、翌日法廷に出でたりしに、事早や探訪の知るところとなり、倫コルンが來意の次第を其日の新聞に載せたりければ、傍聽人は雲霞の如く、寄せかけ、押しかけ、群り來れり。然れども倫コルンは此日何をも辯護せず、たゞ原告が云ふがまに〳〵之を聽き、時々質問を試むるのみ斯くて最後に法官に向ひて、今より三日間の猶豫を願ひ、其まゝ自若として退き歸れり。

傍聽人は之を見てされば三日後なるぞや、此裁判は如何なるならん

罪狀既に分明なり、如何に詭辯を振ふとも惡人を護るの術はなからん、よしなき代言のしわざ哉と、惡口たら〳〵歸るもあり、いなとよ彼は報恩の爲めに自ら遠く來れりと云へば、曲庇者にてはあらざらぬ殊に罪證分明とは云へ、事まだ判決したるにあらねば、如何なる反證の出で來るやも是れ亦敢て保し難きに非ずや。聞く被告には老母あり今年六十有餘なるが、唯是れ一子の被告を杖柱に餘年を送るものなりとぞ。されば殺人罪にしていよ〳〵事實ならんには、又詮術もあらずといへども、若も寃罪ならんには如何に可憐の事ならずや、萬一被告が寃罪と定り、犯人他處に顯はるゝことあらんか、被告の幸。老母の喜果して如何あるべきぞやと憐情深く涙含み、鼻涕啜りて歸るもありけり。

阿ブラハム、倫コルンは三日の猶豫を願ひおき、如何にしても此間に、眞僞黑白を探らんものをと、其より百方手を廻し、種々の辯護證を取り集めさせ、日夜調査を遂げたるところ、此に原告の訴狀に對して、一大確實なる反證を見出したり。即ち原告の申立には、彼の夜何時何分の比、アームストロングが、棍棒を擧げて相手を擊殺したるを見たりと云ふ、而して其の之を見たりと云ふは、乃ち月影に由りて見たりと云ふなり。然れども、曆象を調査するに、原告の所謂る其夜其時其刻は全く月出前なりとす。於此乎倫コルンは大に喜び、能くこそ思ひつきはべれ、果して惡漢の虛構なりきと、天を仰で感謝をなし、其翌即ち三日の後勇み進んで、法廷に出でたり。然れども未だ發見の反證を包んで、更に他人に告げざりければ、之を知るもの絕てなく、皆

々打寄り群り來て樣子如何と窺ひたり。此時アームストロングは藍面瘦骨、よろぼひながら、引かれて來て、差し目向地て居たりしが、やがて倫コルンを斜に見て、寄せたる眉を聊か開き、沈める眼に波立たせて、感謝の情を送りたれども氣弱性ゆゑ、今はしも兎角黑部にさまよふて、殆ど望を絕ちしにや、暫くにして又しほたれ打俯しつ、生色とてはあらざりし。老母は傍に控へしが、之を見るより、堪へずやありけん、ワット一聲放ちしが其まゝ潸々と泣き俯したり、傍聽席よりは之を見て、ハンケチ隻手に取りあげて、サクリ泣すも往々ありき。裁判官は嚴めしく、原告人等は得意顏に、新聞記者等は冷淡に、孰れもそれ／＼坐したりしが、暫く彼れ此れ問答の末に、やがて倫コルン起ち上りたり、身の丈六尺四寸、突兀として四方を壓する勢、目光烱々、

雷光人を射るの威、如何にも甚ろしくみるが上に、其聲を發するや、重にして强、其說を陳ぶるや、明にして快なりしかば、人皆驚いて、聞きすましつゝあるほどに、倫コルンはやがて先づアームストロングの爲人を述べ、又其殺人罪を犯すものたらざるゆゑんの理を演繹的に辯じ去りて、後突如として原告に問て曰くアームストロングの犯罪の何日何時何處なりしや、又如何にして之を知りしや、原告乃ち答ふるに前日の言を以てす。於此平阿ブラハム、倫コルンは、竪髮決眦、怒れる音聲諸共に、原告の面をはつたと睨みて、アヽ汝禍哉、奸邪佞讒の惡物よ、汝は月影に由りて、アームストロングの殺人罪を認めたりと然ども余曆を以て調査るに、彼夜二三時の後にこそ、月影あれ、汝が云ふ其時刻には月球未だ地上に現はれざる也。斯ても尙ほも論ふか、

愚かなるかな、汝の奸策、汝天を畏れざるか、さらば天に向ふて對ふべし、汝本心を畏れざるか、さらば本心に向ふて今對へよ、如何々々と責めよりければ、原告は靑くなり、又赤くなり、戰き震ひ居たりしが、終に堪へ得ずなりたりけん、一言だも應へゑず、やがて起つよとみるまもなく、法廷外へ逃げだしたり。=此者は其後捕縛せられ終に絞罪に遇ふ、網を張り自ら此に罹る、人間萬事此の如し。=されば倫コルンは之を見るより乃ち法官に向ふて曰く、黑白旣に分明なり、速に無罪の判決ありたし。此時夕陽西に沒せんとして、僅かに二竿の紅を殘す、倫コルン乃ち顧りみて夕陽を仰ぎ、振り回へりて又法官に向ふて曰く、日已に沒せんとす、冀くは義陽の暫く耀く間に、早く無罪の宣告を請はん、余は其間坐せざるべしと、昂然直立して退かず、法

官躊躇す。傍聽席なる多くのものは嘗て皆原告を信じ、被告を惡み居たりしに、今や倫コルンの反證を聞き、又原告の逃げいでしを見て、忽ち人氣一變して被告を憐れむの情、俄然として起り、騷々囂々と動搖めき居たるに、今法官が躊躇するを見て、人氣一層荒立たんとせしとき、倫コルン又口を開いて曰く、抑々余が今回辯護の勞を執る、敢て委囑を受けて來りたるにあらず、被告は實に余が恩人の嗣子たるなり。嘗て記す、余歲二十二三の比、獨學以て法律の研究を始めたりしが、不便殆ど云はん方なし、惟へらく、此れ余が獨學の能く及ぶところに非ず、聞く某所に法律學校ありと、余や貧にして入學の資なし、然れども余が手幸にして農業に慣る、顧ふに其學校の近傍には必ず數多の農家あるべし、往て之が雇人となり、間を得て通學せば、亦た可

ならずやと思案既に定まりたり。於是乎旅裝して往き、行々農家を尋ね告ぐるに我が志を以てすに、皆答へて曰く、我家通常の雇人を要す然れども學生の雇人を要せざるなりと、蓋し其の職を怠るを恐れてなり。余大に窮す、然れども尙落膽を支へて彷徨あるき、一日又一農家を叩き、告ぐるに亦た我が志を以てす、蓋し詐ることを好まざればなり。然るに幸なる哉、此家の主人は却て大に我志を賛し、愛憐の眥を垂れて我手を握り、壯夫よ余れ已に汝が志を聞けり、又既に汝が質直を見たり、來れ敢て勞働をなすに及ばず、我家族となつて我家に寢食せよと、乃ち喜んで余を納れ、余を子の如く愛しにき、是れ卽ち被告の父なり。余が今日あるゆゑんのものは、全く此人の德に由るなりと云々、而して此より尙ほも細やかに、該家族より受けたる恩義の次第を

演ずる中、懐舊の情にたえずやありけん、不覺音聲濕り來りて涙滴二三點滾しければ、滿廷水をうちたる如く、靜まりかへりて音もせず、酸鼻の聲のみぞきこえける。法官は終始默然たりしが、於此數分の休憩を命ずる旨を報じ、やがて一間に引き退きしが、暫くして又立歸り來り、乃無罪の宣告をなし、アームストロングを放免したり。アームストロングは夢に夢みる心地やしけん、餘りの嬉しさに、倫コルンの傍へに躍りゆき、手を執り、脛を抱きながら、大聲を放て泣きければ老母も後よりよろぼひゆき、亦た其傍へに身を投げて、前後不覺に泣き入りにける。此時夕陽黯淡として將に入沒の際なりける。

既に前述の如にて、阿ブラハム、倫コルンは、一千八百四十二年、固くイリノイ州議員の候補者たるを辭し、專ら代言に鞅掌し、更に復た政界を顧みざりしに、一千八百四十四年、＊ヘンリー、クレイが我黨大統領の候補者たるを聞くに及で、乃ち曰く、彼は我生國ケンタツキーの人なり、我親友なり、我主義の將なり、助けざるべからずと乃ち出でイリノイよりインデアナに渡り、諸方に說演を張て大に盡す所あり。反對黨はポルクを候補者に擧げ、有名なるネブラスカのジョン、カルホンをして阿ブラハム、倫コルンに當らしめたり。阿ブラハム、倫コルンは其學遠くカルホンに及ばず、名望も亦遙に其下に在りしと雖ども、當時經濟學上の大學戰を試みしとき、阿氏の學識却て加氏に優りしかば、聽衆は皆舌を卷き「折薪者何日間に學問せしや」、と驚

かぬものぞなかりける。されば此期は不幸にして自黨の敗績となり、其目的を達することを能はざりしと雖ども、阿氏の名聲は、此時よりして益々擧り、遂に其後二年を經て、一千八百三十六年イリノイ州の中央部より、愈々國會議員に撰擧せらるゝに至れり。

*ヘンリー、クレーは米國史中屈指の政治家なり。今こそ反對黨の地位に立て、一千八百十二年にはジョン、カルホンと共に國會に在り、相携て運動し、當時英國の處置に對し、頗る憤ところあり、正義を唱て滿會を激動せしめ、其結果として遂に英國と第二の大戰爭を開かしめたる人なり又ヘンリ、クレイは天眞自然の良性を保ち、常に國民に愛せられたり、其不義者を睨視して立つ時には、怒濤の捲き來る如く、之を能く禦くなきの勢を有したれども、其惻怛不忍

の情は彼をして媒介平和者の名を負はしめたり、乃ち彼は五十年間國會に在りしが、常に政黨間に調和を求め。ミソリー事件の調和、貿易加税事件の調和、オムニバス事件の調和、皆彼れの力に頼れり。彼れ大統領の候補者たること三回、不幸にして一回だも撰擧せられざりしと雖も、其德と其功とは國民今に至るまで欽仰して衰へず、一千八百五十二年齡七十五にして死す、其死するとき有名なる政治家ジョン、シ、ブレッキンリッジはかねてクレイの政敵なりしかども、友誼彼を愛するの情に堪へず、殊更に彼を弔するの演說をなしたり、其中に曰くア、若し余をして彼の碑銘を記せしめなば、余は石上に斯く刻まん、曰く、「玆に國家の爲に五十年間忠勤を盡したるもの横る矣。彼れは一回だも國民を欺くの邪徑に誘惑せられざりし。」

と又之を聞くヘンリ、クレーは侵禮教會教師の子なり、五歳にして父を失ひ、貧にして學資なく、去て農家の雇人となり、間を得て學業に勉めしと恰もリンコルンの如くなりし、されば人情を能く辨へ弱を憐むの心厚く、後にホイッグ黨の首領となり、奴隷廢止を主張したり。而して其ポルクと爭ひし要點も、亦た全く奴隷議論の中心たるテキザス加入の拒絶一件にてありしなり。倫コルンが彼を愛して己が師友と仰ぎしと偶然にあらざるなり。

一千八百四十六年倫コルン愈々國會に乘り出でたり。此の時に當つて、奴隷の論議殆んど將に火口に達し、今にも破裂せんず勢なり、演說家に於てはウエンダル、ヒリップ說教家に於てはヘンリー、ワルド、ビーチャル、孰れも言論場裡の猛將なるが、已に奴隷論のために打て

出で奮戰正に酣なり。小說に於てはアンクル、トムス、ケーピン、詩歌に於ては呂氏が弔奴の吟類、隱々亦た人心を風動し始めたり。然而して逃亡奴隷事件の裁判到る處に紛起して、人心益々殺氣を帶ぶるの外飜て南方を顧みれば、奴隷益々繁殖し、既に三百有餘萬の人口を有するのみならず、綿繰機機發明の後、需要益々盛にして、富榮の途、眼前に開けゆけば爭で容易に廢奴の議論を肯はんや、動もすれば干戈に訴へ、勝敗を決せんとするの傾あり。而して又歐洲諸國を回望し來れば、同じく奴隷の大議論起り、英國にてはグランビル、シャープ出でたり、ウイリヤム、ウリバルフォース出でたり。ピットあり、フォックスありて、同じく奴隷使役の不正を主張し、一千八百三十三年即ウリバルフォースの死する年、而して倫コルンが始て議院に出でたる

の年。漸く禁奴の法令を地球上の領地に下したれども、佛は未だ其例に傚はず、スペイン、ブラジル等は奴隷賣買禁止條約を結びしと雖ども、事、實際に行はれず、奸商なほ其惡を逞ふするあり。降て一千八百四十一年に至りて、歐洲の五大國漸く盟約を結び、互に奴隷商を捕獲するの權利を許せしと雖ども、佛の未だ之に加はらざるありなどして、議論粉々、全歐方に響震す。

此時に當て阿ブラハム、倫コルン始めて國會議員となりたり。されば奴隷議論の熾なること勿論にて、たとひ築港案、治河案、貿易案等、ま丶其間に加はりしと雖ども、多くは奴隷事件の喧嘩なりし、此間に阿ブラハム、倫コルンは先の大統領ジヨン、クンシイ、アダムスと共に奴隷廢止の哀訴願を受けんことを主張し、キツテングと共にコロンビ

アなる奴隷制禁の議案を辨護し、四十二回、彼の有名なる Wilmot Provisio の爲めに起立す。蓋し Wilmot Provisio とは議員ウイルモトが提出したる議案にて、凡そ合衆國に入り來る Teritory 領分に於ては全然奴隷を禁廢すべしとの說なり。如此阿ブラハム、倫コルンは終始一の如く、不仁不義不正なる人類賣買の惡業に大反對を試みつゝありしが、此と同時に Senate 上院に於ては有名なる辨士ダニエル、ウヱブスターあるありて、亦頗る危言激論をなし、奴隷賣買に大不同意を唱ふる最中なりし。然りと雖ども如何にせん、此時反對黨は兩院に於て多數を占め、大統領ポルクも既に敵黨なれば力及はず、多くは皆敗をとり、テキザス加入事件の如きも、遂に我論立たざるが爲めに、今やメキシコとの大戰爭となり、此年の九月、卽ち倫コルンが議院に坐

する三ヶ月以前に、漸く其局を結びしほどにて、腥風いまだ收まらず魍魅猶其影を藏めず、於此倫コルンは憂國の情禁ずることこ能はず、或は激昂し、或は鬱憂し、最も不愉快に、此國會を送りしと云ふ。

一千八百四十八年、卽翌年阿ブラハム、倫コルンはテーラー將軍を我黨の大統領たらしむるに賛成し、爲めに大に盡力する所あり、遂に其目的を達し、其翌年國會議員改選の時、已れ再び其候補者に撰定せられしかども、固く辭して之を受けず、因て更にオレゴン州知事の候補に擧られしも、思ふところありとて、亦た之を辭し、再び代言の業に復したり。

其より五年の間は、專ら代言事業に執掌す、而して憂國の念慮は依然として、胸間に蟠ると雖ども、政治上の熱意はまた以前の如くあら

ざりしに、一千八百五十四年、卽ち彼の有名なるカンサスネブラスカの議案出で來りて、國會議場將に破裂せんとする、危急存亡の時に際し、乃ち復た憤然として政海に入るの志を興しぬ。

カンサスネブラスカ議案とはカンサス、ネブラスカの二ケ處を合衆國の領地に加へ、而て之をして奴隷を禁止せしむるや、否やは、全く其二領地の人民に一任し去り、合衆國政府は之に干涉すべからず、何となれば元來奴隷使役云々の如きは全く人民の自由に任ずべきものなり、其の之を不正不義なりと主張するとも、其は之を主張するものゝ意見のみ、若夫れ之を惡事にあらずと信ずるものよりして之を見れば、則ち其所謂る不正不義なりと主張し、他人をして無理に其意見に從はしめんと務むるこそ乃ち不正不義と謂はざるべからず、蓋し是れ一方

の偏見を以て妄りに他方の權利と自由とを剝奪し去らんとするものなればなりとの議論にして前記せるスチーブン、ドグラス當時國會に在て之を主張し、此議案を國會に提出したるに合衆黨皆之を賛し、多數を以て議決したるものなり。然るに共和黨に於ては何處までも之を拒み人類賣買の不義不正たる今更論ずる迄もなし、加之熟々我合衆國の憲法を案ずるに「夫れ人は各々自由平等の天權を有す」との明文の實に赫々誣ゆべからざるものあるなり。人とは何ぞや、凡そ萬國萬民橫目竪鼻の人類を總括したる名稱に非ずや、然則今日奴隷たる黑奴アフリカ人も亦我所謂る憲法中の人たるや明なり。嗚呼我合衆國國民等は平生公明正大なる議論を以て自家の權利と自由とを主張しながら、今や翻て他人の自由と權利とを虐奪し、之を品物と呼び之を所有物と唱へ、

之を賣り、之を買ひ、生殺與奪一に皆我意に任せ、之を禽獸同一に虐待す、抑々之を何とか云はんや、是れ啻に天理人道に戻るのみならず正しく憲法の違反者なり。ア、汝等は自由と權利との爲めに七年の苦戰を嘗めたる尊き祖先の家を世々にし、尊き憲法の蔭に庇護せられながら、祖先を辱かしめ、憲法を蔑視し、合せて天に逆らひ義に戻らんとするか、殊にカンサスネブラスカは一千八百二十年所謂 Missouri Compromise ミソリー、コンプロマイス約の（ミソリー、コンプロミスとはミソリー州を合衆國に加ふるとき、奴隷議論大に起り、終にへンリー、クレイの盡力によりミソリーの南境卽はち緯度三十六度三十分より北部は全く奴隷を嚴禁すとの調和策を用ひ、之れを國會に於いて可決したるものなり、緯度より北に在るものなり、然則此のカンサ

ス、ネブラスカ議案たる全く多年の既決案を破壞するものなり、之れをもし採用可決せんか、我が自由國は乃ち奴隷國たらざるべからず云々と云へる、大議大論なり、＝此れぞ是れ正しく合衆共和兩黨議論の分るゝところなり。

此時まで倫コルンは全く代言に從事して又他念なかりしが、之を聞て奮然として起て、曰く、國家當に急也、余出でざるべからずと、直に政界に跳入したり＝眞正の豪傑は至誠止を得ずして始て起つ、又名利を思はざるなり＝此年即一千八百五十四年上院議員一名の改撰あり。倫コルン自ら之に當らんと欲し、乃出づ、此時に當りてドグラスは既に自ら上院の議員なれば敢て我身の爲めに之を爭ふの必要なしと雖ども、自黨候補者の爲めに來り戰ふ、蓋し倫コルンと同鄉なればなり。

於此乎倫コルンは直に書をドグラスに送り、時の習慣に從て立會演説を挑む、ドグラス之を諾し、其年の十月四日＝即ち我が帝國に於ては恰もコンモンドル、ペルリが始て浦賀に入込みたる年にして、是れ亦危急存亡の秋なりし、＝立會演説第一回をイリノヰ州の State fair ステートフエアーに開く、此時、倫コルン、ドグラスに先つて演せしに、其語の奇にして、其論の適切なる、聽衆は大拍手大喝采、倫コルン萬歲の聲屋宇を飄搖せしむる勢なりし。於此乎ドグラス終にこらへえず突然起て叫つて曰く、夫れ神は撰擇の自由を人間に與へたり、是れカンサス、ネブラスカ事件の原因也と、倫コルン直に答て曰く、然れども神は惡逆を惡み賜ふなりと、斯くて自若として演じ來り演じ去り、ドグラスをして殆ど起つ能はざらしむるに至りたり。然れども流石のド

グラス更に之に挫屈せず、傲然として倫氏の後に登壇し、巧に詭辯を弄びて、瞞着の秘術を盡せしかば、一時は濤瀾を回すの勢ありしも、遂に明確なる反論立つること能はず、日も已に暮れかゝりければとて、中途にして演説を止めたり。而して其夜前説を續くべき約束なりしも卒に登壇を見合せたりと云ふ、能々絶望したるものなるべし。

第二は、ピヲリアに於ける立會演説なり、此日ドグラスの狡猾なるや、前きに後席に出でたるを悔ひ、這回は己れ先づ登壇なせしが、午後二時より六時まで、全然四時間の間續け樣に演じたれ、蓋し夕六時には田舍より來れる多數の農夫が歸路に就くべきを豫知すればなり。而して果して其豫知の如く、遂に退場して出で去りたるも多かりし、然れども倫コルンは猾手の畢竟拙策たるを知るが、故に却て心に之を喜

びドグラスの演說終るや、聽て悠然として起て、聽衆に向ひ、暫時食事の爲め休憩する旨を報じ、其より一時間餘を經て、泰然として壇上に現る、此時聽衆大に減少し居たりしも、心竊かにドグラスの猾策を惡み居たれば、未だ倫コルンの開口せざるに先だち、倫コルン萬歲の聲拍手の間に響き渉りて、人氣既に動きけれは、一言一句强弩の的を穿つが如く、節々骨々まで鑽き入れける。ドグラスは滿堂の忽ち燃へ上がりしを見て、我顚遲しと起ち上がりしが、氣おくれやしけん、音聲また以前の如くならず、辨駁暫時卒に罪を喉頭の患に托して退きぬ、此を以て二回とも勝利は全く倫コルンに歸し、倫コルンの名聲はます〳〵沛然として溢れける。

此の如くなれば共和黨は倫氏の爲めに終に全勝を制したりしが、之

より先き共和黨中議員候補者豫撰の節、投票二つに分れ、一方は倫コルンを擧げしも、一方はライマン、ツランブルを擧げしかば、倫コルンは自己の投票者に向ひて、鷸蚌の爭の不得策なることを說示し、殊にツランブルとは刎頸の間なれば、彼れの撰ばるゝは即ち正しく己れの撰ばるゝに異ならずとて、斷然辭してツランブルに讓りしにツランブルも亦た之れを受けず、敢て之れを倫コルンに讓らんとす、然れども倫コルンの決意は到底動かすこと能はざれば、止むを得ず之を受けしに、滿座皆倫氏の潔きに感激して、落涙せしもの多かりしとぞ。於此乎ツランブル愈々大多數を以て上院に入れり。此時倫コルン再び知事の候補者に擧げられしも亦就かず。

翌年即一千八百五十七年有名なる Dred Scott の事件起る、スコット

は黑人なり、妻子諸共一紳士の奴隷たりしが、其主人のミソリー州に移住するに及んで、自由を請求せり、何となれば彼のミソリー調和策の決議に由りて、ミソリー州なる奴隷は皆悉く自由たるべきものなればなり、而して主人容さず、因て之を法廷に訴ふ、此時カンサス、ネブラスカの議論と共にミソリー調和策決議の議論頗る猛烈を極めたる際なれば、判決如何と人皆唾を呑んで待搆へたりしに高等法院は大膽にも、終にスコットをして敗訴に歸せしめ、凡そ持主たるものは何れの州と土地とを問はず、財產の權利と共に奴隷を運び行き得るとの判決を下せしより、人心の激昂甚しく將に戰亂の徵候を顯はし來り、カンサスに於ては兩黨——寧ろ正邪か——の軋轢ます〳〵甚しく日々に人血を流し來りが、遂にボルジニヤにジョン、ブラオンなるもの現はれ出

で、同地の義俠を糾合し、擧兵直にボルジニアの武器庫を奪ひ、進んで全州の奴隷に自由の布告をなすに至れり。然り而して事成らず身絞罪に處せられしと雖ども、此よりして物情恟々、人々戰亂の近きを覺悟せり。

當此時、倫コルン再びドグラスと上院議員の撰擧を爭ふ。卽一千八百五十八年、卽倫コルンが大統領に撰擧せらるゝ二年前卽倫コルンは合衆黨の益々壓逆暴戾に陷り、邪惡の時を得顏に跳梁するを觀て、義憤に堪へず、謂へらく、本年の改撰は卽ち國家存亡の分目なりと、此に於てか又た書をドグラスの許に送りて、立會演說を請求せしに、ドグラス之を諾し、八九十の三ケ月を期し、七ケ處に於て開演することに決したり、此時双方より贈答したる書狀あり、余之を觀るに墨痕曾て

敵愾の意を帶びず、誠に公明正大、濃厚穩和、政敵なれども友誼の情紙面に溢る、余顧て我國政黨の情況に至り、慨嘆すると之を久す。

既にして合衆黨にては愈々ドグラスを候補者に指名し、共和黨にては倫コルンを指定したれば、約の如く立會演説を開き、最初はオタワ、第二はフリーポルト、第三はジョネスボロ第四はクインシイに於てす。

此會や二氏共に畢生の力を盡したり。何となれば、當時倫氏は既に共和黨中錚々たる人物、而して土氏は合衆黨出色の傑士にてありければ、二年後に來る大統領改撰の期には或は又兩黨より二氏を推すとあらんを知ればなり、＝而して實に其の事ありし＝加之國家安危の境なれば、二氏の勝敗は卽ち國家百萬の生靈に大關係を有すればなり。

此間兩氏議論の要點は、即ち前章に掲げたる、合衆共和兩政黨の議論の要點に異ならざれば、更に玆に復するを要せず、然りと雖ども、玆に兩氏の性質を觀察し、兩氏の意志を討尋し、而して兩氏が由て成敗する所を看破し、以て吾人が警鑑たらしめんと、蓋し最も必要なるべし。

ビーチャル、ストウ女は彼の有名なる「アンクル、トムス、ケビン」の著者にして現に倫士の立會演説を傍聽したる女子なり、嘗つて倫士を評して曰はく、士氏は最高等の紳士なり、風采人を壓し、言辭華を散ず＝即ち演説體なり＝倫氏は寧ろ素朴漢なり、風采疎野、言辭卑近なり＝即ち談話體なり＝然りと雖ども、後者は自然的の人にして、前者は作爲的の人たるを免ぬかれず。士氏の心は如何にせば人心を動か

し得べきやと思考し、倫氏の心は如何にせば、我義務責任を盡すべきやと商量す、士氏は方法を主とし、倫氏は眞理を主とす、士氏の主義は實利なり、倫氏の主義は公道なり、士氏は詭辨を厭はず、猾手を忌まず、唯だ勝利を是を求む、倫氏は毀譽褒貶を避けず、成敗得喪を顧みず。唯信實と至誠と本心とを是れ守る。此故に士氏は氣迫りて齷齪たり、倫氏は氣亮かにして泰然たりと云々。

嘗て新潟に居留せし博士ヘンリー、スカツドル氏、一日余に語て曰く余れ倫士の交戰を觀しが、能辯家としては、余れ未だ士氏の如きものあるを知らず、彼れの辯は聽衆各人の心耳に合す、開くあり、抑ふるあり、揚ぐるあり、其輕快なる弄鞠者が鞠を弄するが如く、其激發する電雷の天地を裂くが如し、其華奢にして明決なるは以て婦人の意

を喜ばせ、其鋭意にして忠信らしきは以て懐疑者の心を固め、其峻峭にして嚴正なるは以て憶病者の膽を奪ひ、其巧妙にして感情的なるは以て木石人を點頭せしむるに足る。倫コルンは此等の處皆遙かに彼れに及ばざるなり。然れども倫氏が彼れに打克ちたる所以のものは全く倫氏が正大の英魄と、殊に倫氏が意志力に在りとす、彼れは何事にても爲すべきとなりと信ずるときには斃るるとも必ず之を爲すなり。一回目的を定めて進むときには山嶽も亦眼中に在るなし、一度腰帶を結びて突き入るときには荊棘も嫩草の如し、彼れは此意志を以て貧窮に打勝ち、危難に打勝ち、敵人に打勝ち、困難に打勝ち、終に赤手米國を提げて、古今無双の大業を成就したり、其を福利安寧の域に達せしめたり、其勢恰もナポレヲンが大砲を曳きて、アルプス山を越へたるが

如し。其議論は正理至誠の一直路のみ。曰く余は奴隷を以つて道德上社會上政治上の惡事と確信す、我は他に我が心を轉ずる能はず、此説のある處に我は往き、此眞理の在る處に余は立つ、余は我呼吸の續く限りは此味方に屬すべしと、然而して其之を主張するや恰も闘犬の一嚙の如し、一たび狙て嚙み附けば縱令ひ脛頸斷絶するとも、亦之を放つとなし。故に曰くドグラスの倫氏に及ばざりしゆえんのものは則ち此至誠心と意志力との上に在りと云々＝讀者玩味すべし。

却て説く、倫士の兩氏は、前述の如く四ヶ處に於て、既に立會演説を催し來りしが、士は終に倫に爭ふ能はずとや思ひけん、其後立會ふべき三ヶ處には俄かに破約して之に應せず、却て其後隱險卑劣、幻妖瞞着の手段に出で、己が身代の半額を拋ち、數名の壯士を傭ひ來りて

己が前後に隨せしめ＝何ぞ目下の我國議員の爭に相似たる＝太鼓を鳴らさせ、旗旄を翻へらせ、行くときは則特別滊車に乘り、止まるときは則祝砲花煙をあげさせ、頻りに人氣を收攬し巧みに佞辯を振ひ囘はれり、而して倫氏は又之を追跡して、終に五十六回の大演説會を開けり思ふに龍虎の劇戰全くイリノヰ州中を抓破蹈躪したらん。

雖然此囘は倫コルン卒に敗を取りたり、但し彼は失望せざりき、何となれば彼は嘗て云へり、我國民は教育ある國民なり、本心ある國民なり、自由を愛する國民なり、たとひ一時惑亂して、倒行逆施人天に勝つが如きをあるとも、早晩人氣正復し來りて、眞理公道の味方たらんと更に疑ひあるべからず、余は我國民を信ず、余は我説の眞理なるを信ず、既に之を信ず矣、則ちキリストと共に「余既に世に勝てり」と

曰ひ、且つ架上猶泰然たるを得るなりと云々。

されば舊友にハーデンなるものあり、之は曩きに血鬪の中裁をなせし人なり、倫氏の失敗を聞き傳へ、嘸や失望落膽しつらん、行て慰めばやと思ひつゝ、態て來りて倫氏を見るに、倫氏は更に恥る色なく、又更に鬱屈の氣もなく、談笑戯謔、滿胸喜悅に溢るゝが如く、快活平日に倍したり、因て怪みて、試に彼れの失敗を弔せしに、倫氏の曰くビリー(幼少の時に彼を呼びし名)知らずや。余が今回の失敗は卽ち余をして大統領たらしむる者なることを、小巨人は上議院を得たり、然れども大統領座を失ひたりと、蓋し倫氏の爭ひや、單に正理と實力とに賴りしと雖ども、土グラスは終に之に抗しえず、退て竊かに虛僞と佞辯とに聲援を借りたり、此故に縱ひ幸にして一時の勝利を苟も

せしとも雖ども、心あるものは既に土氏の人となりを看破し、幷せて又倫氏の公明正大の偉人たることを確認したれば、次に來る大統領の撰擧には必ず勝算を期したればなり。而して果して其の如くなりし、大人の心中實に日月の明煌々たるが如きものあり、其言に就き其人を想見すれば頓に我氣字の爽然たるを覺ふ。

大統領の時代

倫氏は此より大統領たらんことを決心し、先づ其準備として全國の各州を巡回し、到る處に政談演說を開き、終にニユーヨルクに至る、倫コルンの名ははイリノキ、カンサス地方に於て既に電雷の如く轟くと雖ども、ニユーヨルクに於ては其名を知らぬものさへ多かりき。初

めブルークリンなるブリマス會堂、卽ちヘンリー、ワルド、ビーチャルの牧師たる教會堂を借り受けて、政談演說會を開き、其報酬として會主より二百弗を受取るべき約定なりしに、之を周旋するもの、中途にして疑惑を生じ、謂へらく、倫コルンの名聲未だ甚だ著れざれば、聽衆或は尠くして、恐くは會費の損失を招かんと、此に於て遂に破談に及びければ、倫コルン大に困じ、更に周旋人を求むる中、舊友あり、頗る彼れが爲めに盡力し、漸くにして金主を發見し、遂にニヨーヨルク市 Cooper Institute クーパル、インスチ、ユートに於て開會することに決せり、實に是れ一千八百六十年の二月なり。周旋人等は人氣如何と掛念せしに、ニユーヨルク時事新聞、其雜報に記して曰く、今回阿ブラハム、倫コルン氏クーパル、インスチチユートに於て政談演說を

開く由、彼はイリノヰの代言人たり云々、是れのみ、嗚呼其記事の冷淡水の如きを見よ、蓋し當時ニユーヨルクに於てはシワルドとて上院議員たる有名なる大政治家ありければニユーヨルクの共和黨等は此のシワルドをして大統領の候補者たらしめんと、豫て望み居たりしゆゑ倫氏に對して冷淡なりしは、又理由なきに非ずと雖ども、然れども誰か其年に於て倫氏が大統領たるべきを知らんや、されば周旋人は大に望を失ひたれども、倫コルンは却て爲めに奮激し、十分演説に仕度を凝し、終に愈々其日となりしに、不思議なるかな、聽衆麕集鱗萃して滿堂早くも溢るゝ斗りに立ち至りければ、倫氏乃登壇して演説せり。＝ハンリー、スカツドル嘗て余に語て曰く嗚呼此の演説なり、此演説なり。實に阿ブラハム、倫コルンをして、始て米國の大空に耀出せし

めたるものは則此演説なり。余れ親しく之を聽きたりしが、彼れの眼は霹靂の火を放ち、彼の腕は回天の勇を振ひ、彼れの口は萬丈の光焔を吐き、彼の議論は兩刄の劍の如く、聽衆の節々骨々までを刺し徹したり、然而して彼れの聲は即ちクーパル、インスチチユートを衝き拔て直に全國に響き渡りたりと云々＝演説終りて後、倫氏の舊友進み出で、聽衆に向ふて言て曰く意ふに本年我黨に於て大統領の候補者たるもの三人あり、曰く當州のシワルド、曰く、オハヨ州の知事チヱース曰く、其名は未だ甚だ著れずと雖ども、甞てイリノキに於て小巨人ドグラスを引き摺り落したる勇者即阿ブラハム、倫コルン是なりと、聽衆は之を聽いて激賛拍手滿堂崩るゝ斗なりしと。

一千八百六十五年五月十六日シカガウイグワム堂に於て共和黨委員

の大會あり、是れ大統領候補者を定めんが爲めたり、初めに十數名の候補者を擧げしが、次第〳〵に陶汰し來りて、遂に二名の數となれり二名とは誰ぞや、曰くニユーヨルクのシワルド、イリノヰの倫コルン即是なり、此時倫コルンは家に在り、樣子如何と掛念し居りしに、忽ち電報の聲したり。急ぎ受取りて之を見るに、大會なる親友某よりの電報にて、中に云へるあり。曰く、今や漸々陶汰し來りて、餘す所は既に君と士氏とのみ乃勝敗は一回の投票に決す。我等は君の爲めに今や幹旋最中なり、然るに茲に一議あり、君それ之を承諾せよ、即ち君が大統領たるの曉には、某州某々の二人をして必ず君が內閣に列せしめんとの內約を今に於て結ぶこと是なり、然るときは今一回の投票にて君が當撰疑ひなしと云々、倫コルンは何事ならんと之を讀みしに、

斯る不潔の電報なりければ、赫として怒り、直に報を反して曰く、貴君の厚意深く之を謝す、然れども余は其約を結ぶこと能はざるなりと是れのみ。=高潔洗ふが如し、我國の政治家少しく顧みて可なり。

然るに如何したりけん、倫氏は如此更に讓るところなかりしかども最後の投票函を開いて之を見れば、シワルドが百十票、而して倫氏が三百五十四票なりし。卽ちシワルドは倫氏の半數にだも及ばざりし、是れ何故に然るか、察するところ、倫氏が淸廉なる擧動を聞き、翻て彼れに左袒するもの俄かに增加したるに由るべし、=正直は畢竟最上の政略=此時ウイグワム館の內には數百の委員と一萬有餘の傍聽人、孰れも臂を怒らし息氣を屛め、片唾を呑んで相構へ、外には數萬の人民波浪を打てぞ群集す、ウイグワムの屋上には十數人立ち待ち扣ゆ、

是れは大統領候補者既決せば、直に其姓名を館外なる群衆に告げ知らせんが爲めなり、されば倫コルンが愈々共和黨大統領の候補なりと定まるや、委員共は各々番號札を撤て頭上に振り回し、人民等は館の内外及び屋上に在て、狂亂喧噪孰れも倫コルン萬歳、共和黨萬歳と連呼絕叫しつゝ、男は帽を振り、女はハンカチーフを翻し、祝砲は耳を貫いて轟き、旗幟は空を排いて動き、其の豪勢得も云はれず、其の間にかねて用意やしたりけん、一丈餘りなる倫コルンの大肖像を差上げつゝ、館内へ運ぶ者ありて、一層滿堂の大拍手大喝采を惹き起したるなど、混雜の態、宛から劇戰の時の如くなりし。かくて電信局に於ては致電人充滿して張り裂く斗り、又全國の各州各地に在りては、右の電報を待受けて、直に所謂 Ratification 候補者確定の祝會を開き、倫コ

ルンの聲全國に鳴る、新聞雜誌其他文字の世界に於ては其記するところ、論ずるところ、悉く倫コルンの事ならざるはなかりし。嗚呼ミシシッピー川上の舟兒、忽ち飛翔の龍となりたり。

却說倫コルンは彼の不潔の電報を受取りて後、未だ己れの大統領に選ばれたるを知らず。故鄕スプリングフヒールドに在て、樣子如何と思ひつゝ、家を出で、電信局に至り、又其より州報局に立寄り、友人等と談話しつゝ、續々飛び來る電報を受け居りしが、終に電信局長より特別の飛報を手にしたり、因て披いて之を見れば、則倫氏が當撰したるの報なりけり。倫コルンは之を打ち見て暫く默し居たりしが、軈て靜かに座を起て曰く、彼の處に小婦＝妻君の事＝あり、嘸や聞かば喜ばん、余れ往て之を告げんと。友人共の嘖々祝賀するを後にして、

直に歸宅したりと云ふ＝大人は赤子の如し。

ウイグワムに於てはやがて人民の靜まるを待て、書記エバルッ氏登壇、倫コルンの正當に撰定せられしを陳べ、さればとて又競爭者シワルド氏の勳德をも表章し、双美一對の取持をなす、素より米國の美風として、既に票決撰定の上は、恰も雷雨の晴れたる空の如く、豁然として復た纎芥の跡を留めず、於此乎委員の中更に又委員を撰び、倫コルンに使して公然當撰の意を傳へしむ、今同行せしシカゴ新聞記者の記錄を讀むに其要左の如し。

委員共特別汽車にてスプリング、フヒールドに到る、到れば則停車場の内外人民の群集すると、さながら雲霞の如し、時に夕七時、樂隊樂を奏し人民歡呼の聲、地をも震はすばかり也、其より旅館に至る、

往來人の山を築いて、進行殆ど難かりし、暫くして皆打揃ふて倫コルンの家に至る、時に八時、家は小綺麗なる二楷家なれども、壯大ならず、華美ならず、綠樹之を圍み、青草地に滿つ、かくて我等將に外階を登りて、家の戸口に入んとするとき、一人は七八歳、一人は十一二歳と覺ぼしき男の子二人出で來りて Good evening Gentleman「紳士今夕は」と云ふ。ニユーヨルクのヱバルツ氏之れを見て打笑みつゝ、卿等は倫コルン氏の公達かと問へば、年の上なる男の子、「然り君よ」と答へたり。ヱバルツ大に喜び、さらば握手せしめよと握手してければ、委員共皆然かす、年の下なる男の子は少しく隔りてありけるが、之を羨やましとや思ひけん、稍々哀みの聲を出して、余も亦た倫コルンなりと呼びしかば、一同ドット出笑しつゝ、忙はてゝ、彼れの手を

も握りければ滿悅の色あらはれけるも孳々的、斯て入堂の後、アシユマン氏委員一同に代り、倫氏に來意を傳ふ倫氏答辭を述ぶ、終りてアシユマン氏の紹介にて委員各々倫氏に握手挨拶の禮を行ふ。此時倫氏直立せしが、皆其偉大なるに驚きたり。ペンシルバニアのケレイ氏は委員中身材最高の人なり、其倫氏と握手するとき、倫氏笑みて問ふて曰く、氏の丈幾何か、曰く六尺三寸、氏の丈幾何か倫コルン氏よ、曰く六尺四寸、此時ケリー首を傾け戯謔を含みて、さらばペンシルバニヤはイリノヰに拜伏す、余は多年余が見上くべき大統領なきを憾み居りしに、圖らざりき、今や小巨人＝ドクラスの事＝のみと思ひし、イリノヰ州より此の大巨人を得べしとは、と口外ければ笑はぬものぞなかりける、委員の挨拶終りて後其處に集まれる有志者、卽余等（新聞

記者を云ふ）の順番となりしが、孰れも皆々先を讓りて、互に兎や角爭ひつゝありしに、ジヤツド氏之を見て、なに遠慮することやある、諸君來れよ、他人に非ず、矢張り以前の「正直アブ」なりと云ひければ、皆又笑ひ喜びつゝ、其よりいとも心安げになりぬ。ミツセス、倫コルンは南の客間にて委員の挨拶を受けらる。ミツセスはケンタツキーなるトツド博士の女にして、容貌性質共に美なり、我等一同其篤厚なる心行に敬服せり、身の丈け倫氏に比すれば釣合はぬほどなれども、通常の婦人なり、ミツセスの低きにあらず、倫氏の高きなり、年齢は三十五六と覺ゆ、男子三人あり、前記の二童の外、當年十七歳になる長男あり、目下ハルバルド大學に在り、斯て我等は喜び祝ひ、笑ひ語りて後、一同旅館に歸る、時に街角祝火燃へ、戸々祝宴を張り、祝砲鳴

て止まらざりし。

此年合衆黨二分し、一はステブン、ドグラスを大統領に擧げ、一はジョン、ブレッキンリッジを擧げしかば、久振りにて、共和黨の大勝利となり、阿ブラハム、倫コルン乃ち陞りて大統領となりぬ。是より先き南方の諸州に於ては、既に豫め覺悟を極め、萬一倫コルンが撰定せらるゝ曉には、直に分離し、別に一政府を打立つべしと、かねぐ揚言しつゝありたりしが、於此乎いよく此が準備に着手し、此年の十二月の廿日を以て、先づ南カロリナより、獨立分離の公布をなし、次いてミシ、ツピー、フロリダ、アラバマ、ジョールジア、ルイシニア、タキザスの六州皆其例に倣へり、斯て人心恟々たる中、翌年二月四日を以て、右の七州各々委員を派遣しアラバマなるモントゴメリー府に

大會を開き、其結果終に所謂亞米利加同盟國なるものを起し、ゼフヱルソン、デビスを擧げて、此が大統領たらしむるに至りぬ。

然れども合衆國政府は之を觀て因循苟且、敢て阻遏の道を採らざりし。何となれば是れ亦同黨同感同穴のものなればなり。

共和黨の人民等は右七州の暴擧並に合衆政府の因循を見て、憂慮悲憤に堪へずと雖ども、倫コルンは漸く當撰したるのみ、未だ即位に至らざれば、一致の運動を試むると能はず、廿一州の有志愛國者等は事の起るを見て、大に駭き、彼の分離各州の大會日、即同じく二月四日を以て、ワシントン府に集合し、南北兩間の調和策を建て、之を國會に訴へぬ。然ども其議竟に用ひられず、百事漾々として見る〳〵戰海に押し流されたり。軍事社會に於ては將卒未だ向ふところを知らずと

雖ども、既に腕を扼して待つありと聞え、タキザスなる鎭臺に於ては指令官ツウイグス將軍を始とし、擧鎭皆南政府に與みしたりと云ひ、而して又南カロリナなるサムタル堡臺の長官なる少佐アンドルソンは今仍巍然として敵中に立ち、死を決して守ると噂す。斯かる累卵一髮の際に於て阿ブラハム、倫コルンは即ち大統領の座位に就けり、時に一千八百六十一年三月四日なり。

或人曰く阿ブラハム、倫コルンは當時暗殺を懼れ、微服してワシントン府に到れりと、然れども是れ全く虛傳にして敵人の放てる流言なりし。何となれば、阿ブラハム、倫コルンが今回大統領の座位を望みしゆえんのものは、名譽の爲に非ず、利慾の爲めに非ず、全く正義の爲め國家の爲め自由の爲めヒユーマニチーの爲めにてありたればなり

彼れは初めより彼れの位置の危險なるを知り、暗殺者の現はるべきを知り、又戰亂の眼前に橫はるあるを知れり、然ども敢て之を避けざりし、彼れ家を出るとき、其隣人に告て曰く、隣人よ我が爲めに天に祈れ、余は善惡の戰に赴くなり願くは余をして終り迄正義の味方たらしめよと、又彼はスプリングフヒールドよりワシントンに到る途中、屢々處々に於て、演說をなせしが、每に揚言して曰く余は最も賤しき最も低き民より大統領となれる最初の者なり、然れども前途を望めば黑雲漠々、思ふに前の諸大統領等よりも遙かに困難なる旅行をなさゞるべからざるべしと云々、彼又途中ヒラデルヒヤに着す、此處は卽有名なる獨立布告堂の在るところなり、彼れ布告堂に到り、人民を集め淚を含んで演て曰くア丶此處ぞ是れ我國自由の出生所なる哉、諸君諸君

果して余が政治に於ける主義と精神とを聞かんと欲するか、乃往てかの獨立布告の大文を讀め、余が政治上の主義精神なるものは卽ち獨立布告の主義精神に外ならざるなり。此主義此精神は我在世の生命なり余は此が爲に生き亦此が爲に死せん事を冀ふと云々、又之を聞く、彼は當選の其日より、屢々威嚇暗殺の狀を受け、毎に之を鐚盤に緘せしに、盤上終に堆をなせりと、然れども彼は敢て之が爲に懼るゝ事なく一日其盤上を指し、笑て友人に語て曰く、此の中最初の二三のみ、少しく不愉快を感せしめしと雖ども、其後は平常信書に異ならざりしと然而して此事や、啻に脅嚇にのみ止まらず、實際彼れがワシントン府に到る途中、バルチモールの近邊に於て、乘車俄かに軌道を逸せり。幸に轉覆せざりしかば、車人下て之を觀るに、鐵道に障碍物橫り居れ

り、於此乎大に怪しみ、其より列車を探驗し來れば、危哉爆裂彈の密藏せるを發見したり、然れども倫コルンは之を聞て、敢て慌愴きたる顔色もなく、泰然自若、又其車に駕せりと云ふ、由此觀之阿ブラハム倫コルンは既に決死の覺悟にてありし、又何ぞ小膽未練なる微行、禍を避くるの方をとらんや、況や此等の事實の如きは明確炳著、皆沿道人民の知るところたるをや。

倫コルン既に大統領たり、衆目皆彼に聚る。彼れ既に內閣を組織す、然れども內閣未だ一致せず、或は曰く去る者は追ひ易からず、分るゝものは合し難し、寧ろ南方をして其の爲す所に放任せしめ、我等をして我等の藩圍を守禦せしめよ、或は曰く彼等は謀反暴擧の徒なり、速に鎮定の策を運らすべし、或は曰く是れ至難至澁の議なり、今にして大

戰を開かんとするも、國幣匱乏、兵士散落何を恃て敵に當らん、或は曰く南北兩立今日敢て不可なるを見ず、然れども是れ後世に競爭の戰鬪國を遺すなり、流血の源を造るなり、たとひ今日一時戰を開き百萬の生靈を殺す事あるとも、後來年を逐ふて幾千萬人を殺さしむるの毒種を播くに孰若れぞやと、議論紛々亂れて歸する所なし、此時倫コルン直立して曰く正邪既に分明なり、得失既に判然たり、我等は徒に目前の艱を懼れて、災禍を後世に遺すべからずと、於此乎衆終に因循姑息の策を棄て斷然雄進するの覺悟を定む。

此時サムタル保臺の將アンダルソンは仍ほ依然敵中に堅立して在りしが、南政府の將軍ボンガルド兵を帥て來り迫り、頻りに降服を勸む然れどもアンダルソン屹然として應せず、於此乎ボンガルド終に南北

戰爭劈頭の砲丸を放つ、實に是れ一千八百六十一年四月十二日金曜日の午前四時三十分なりし、アンダルソン能く防ぐ、然れども敵は七千味方は七十、衆寡竟に敵せず。三十四時間の激戰を經て終に堡臺を敵手に委せり。

而して人情はまた奇なるものなり、此報の一たび全國に聞こゆるや人心激昂、敵愾の氣勃發し、復た抑ふべからず黨派心は忽ち變じて、南北心となり、北州に在る者は其合衆黨たると共和黨たるとを問はず互に相合して現政府を維持せん事を欲し、南に在る者は亦同じく相合して新政府を建立せん事を務め、斯て南北劃然として分離しければ、今迄中間に在て躊躇したる、ボルジニヤ、アーカンサス、北カロリナテンネッシイの四州が俄に南方に加擔したるを以て戰焰ます〳〵激騰

し、將に全米を卷きて燒き去らんとするの變相を呈し來れり。於此乎阿ブラハム、倫コルンは直ちに號令を天下に下し、七萬五千人の兵士を募りしに、三十萬の義勇兵、立ろに臂を奮て從軍を申出たりと云ふ亦た盛なりと云ふべし、南方に於ても亦政府をボルジニヤのリツチモンドに移し、同じく兵士を徵募せしに、是れまた數十萬の貔貅を得たり、於此乎有名なる南北四年間の大戰となる。

余輩は米國史を記するものに非ず、故に一々戰鬪間の細事を筆するを欲せず、若夫、迅雷、奔霆、風舞ひ雲飛び、龍躍り、虎怒り、積屍流血、轟砲裂彈の間に於て、グランド、セリデン、ジヤクソン、リー等が撼天壞地の勇を振ふ有樣、幷に堡崩れ、艦沈み、刀折れ、馬斃れ怪霧暗澹たるの間に於て、死人横はり、老幼迷ひ、赤子泣き、寡婦叫

ぶの慘狀に至りては、余輩の感想亦當に戰亂の念を惹起し來る、然りと雖ども、此れは是れ他事のみ、余輩は只だ此間に處したる、聖傑阿ブラハム、倫コルンが心行如何を觀んと欲するのみ、夫れ阿ブラハム倫コルンは陷溝の豚兒をすら見過す能はざるほど愛心の深き人なりし然則此戰亂の間に於て果して如何なる感情ありしや、蓋し聞く彼れは兵士の斃るゝ樣、寡婦の嘆く聲、老幼の顚沛する狀態を想見する每に悲慘やるところを知らず、オヽ余れ彼等を憫れむとて天を仰いで大息せし事實に幾回なるを知るべからずと、又彼れは此間に於て、憫情殆ど禁じ難く、終に數名の死刑を赦るせり。（前章に其一例を示しおけり彼れは又總軍に令して可成南方の兵士を憫れみ、其降を免るし、其負傷者を介抱せよと嚴達したり、彼れは又大統領館に在りて、日々劇務

に襲はるゝと雖ども、日として負傷者の病院を見舞はざる事はなかりし、或人彼れの病院に在るを見て、食事を要するや否やを問ひ、且つ「近頃は何處に食事し賜ふや」と問ひければ、彼則答て曰く「余は近來更に定りたる食事せず、唯時々立食するのみ」と、由此觀之倫コルンの心情誠に察すべきものあつて存するなり、雖然彼れの意志も亦た驚くに餘りあるを見る、彼れは既に鞘を拔て進めり、又た顧後囘踵せず彼れは既に正義を蹈んで立つ、又躊躇逡巡せざるなり、たとひ脅嚇と危險に出で會ふとも、たとひ葛藟と株木とに纏はるとも、其足は躊む事なく、其眼は朧む事なく、鐵腸石膽甕れて後に已むの精神は、偉大なる身幹に充滿したりし。彼れは非凡の達識明智なり、此故に徒に暴虎憑河の擧に出でず、前後を顧み、急緩を計り、適宜に其意志を運

行したり、彼れは猶豫したりし事なきに非ず、然れども是れ畏縮したるに非ざりし、彼れ或は迂回せり、然れども凜たる其意志は依然として直進直行したり。されば彼れが奴隷禁止を實行したる顚末を觀るに、彼れは初めより建國獨立の布告に基き、總ての人は同胞として生れたり、天父の許し賜ひたる權利は人之を壓する事能はず、總ての人類は其容貌と面色とに關はらず、均しく生命と財産と幸福との自由を有するものなりとの趣意を主張したりしと雖ども、其の之を主張したるや、直に之を全國に實行せよと、主張したるに非ず、彼れがカンサス、ネブラスカ案を聞て奮然躍出したる所以の者は、合衆黨ドグラス等が不正にも、不條理にも、人氣に媚び多數を恃んで、憲法を破り、規約を蔑如し、壓制を以て己が邪論を全國各州に實行せしめん事を企

だてたれば、最早や忍耐する事能はず、至誠已むを得ずして起ちしのみ、此故に彼れは大統領職に就きたりと雖ども、直に奴隷全禁令を出す事なく、先づ其初は一千八百六十一年七月九日に於て「凡そ遁れ來りたる又は潜匿する奴隷を縛し又之を持主に返す事は合衆國兵士の責任に非ず」、との布告を出し、其後又直に「凡そ海陸の別なく、我合衆國政府に抗して戰ふ事を強ひられたる奴隷は皆悉く自由の民たるべし」と云へる第二の布告をなし。次いて、同年十二月十九日「凡そ如何なる州にても我合衆國政府の下に在るものは奴隷の使役を禁ず」、との布告をなしたり、然れども未だ南北全部に奴隷廢止を令するに至らず、蓋し其或は敵をして決死の勇を奮はしむる事あるを恐れてなり。既にして一千八百六十二年、敵將リー大擧してメリーランドに侵入し、將

にワシントン府を襲擊せんとして、軍鋒頗る鋭く、警報頻に至る、於此阿ブラハム、倫コルン神に祈て誓て曰く、リーをして若しメリーランドより進む能はず馬を反して退かしめ玉はゞ、余乃ち其祝賀として直に全國奴隷解放自由の布告を出すべしと云々、而して果してリーが沮退せしを以て翌年一月六日乃ち愈々有名なる Emancipitation Proclamation 奴隷解放令を出して、全國四百萬の奴隷に自由を與へぬ。斯て同年四月廿日白人同樣の權利を以て黑人を兵士に編入する事となし、其後戰亂終局南方降服の時に及んで、愈々國會の決議を以て凡そ合衆國中は如何なる處にても亦何日までも奴隷の使役賣買を許るさざるべしとの一ヶ條を憲法の中に加へしむるに至りたり。於此乎乃ち阿ブラハム、倫コルンは遂に、全然其意志を貫き、其目的を達したりき

由是觀之阿ブラハム、倫コルンは狂奔暴進せざりしを以て、其或は躊躇因循に似たる所なきに非ずと雖ども、彼れが剛毅の志は終始退轉せず、正に定まりたる目的に向ふて奮進したる跡あるを見るなり、是れ唯ゞ彼れが大統領たるの日に於て、之を見るに非ず、彼れが大統領たるの地位に至りし所以のものは、即ち亦た此忍耐と此意志とに由らずんばあらざるなり。

英雄の常に困するところは、人の己を知らざるに在り、否、寧ろ人の己を知ること能はざるに在り、トマス、カライル嘗てコロンウヱルを謂て曰くコロンウヱルは凡俗の眼には、高大に過ぎたり、此故に凡俗屢々彼を誤認せりと、此言深く味ふべし、凡そ凡俗の眼力にては決して大豪傑の爲人を明知洞見すること能はざるなり。是れ其の心事の冥晦

幽玄なる故に非ず、神出鬼沒端倪すべからざるものあるが故にも非ず大豪傑の心事は光明なるものなり、其行爲は正大なるものなり、然れども凡そ大豪傑なるものは必ず陰陽の兩性を備ふ、是れ其洪偉完全なるが爲めのみ、例之玆に人あり、慷慨悲憤赤心烈火の性を有す、然れども高朗明活深謀達識の才量を有せず、試に此人をして國家の大權に當らしめよ、其れ或は兕奮虎擊の威を震ふて、馳騖奔飛、能く打破的の偉業を成し遂ぐるとはあらん、然れども其能く緩急に處し、前後を辨へ、百年の爲めに建設的の鴻勳を奏するに至ては則難し矣。又玆に人あり、悠優君子の風あり、或は又敏捷活馬瞳を拔くの智あり、然ども一は至誠憂國の氣慨を欠き、一は拔山倒海の意志力を欠くものとす試に此者をして國家の大難に當らしめよ、一は窘窮縮蹙沮喪失機終に

大事を誤るべく、一は苟且希功詭遇弄巧須臾にして鼠竄すべし、是れ大豪傑に非ざれば也。夫れ大豪傑なるものは、所謂る完全なる人物なり、氣慨あり、智巧あり、度量あり、而して其物相和合す。此故に迅雷風烈の中に在るとも、猶能く顏を開いて大笑するとを得るなり。暴進奮突の群に在るとも、猶ほ緩急を議するとを知る、而して小人は其大を察せず、徒に其意を訝り、從而又其行を謗るに至る。阿ブラハム、倫コルンを觀るべし、彼れは非常の人望を以て大統領に陞れり、然れどもが南北劇戰、雌雄未だ決せざるの時に當りてや、非難四方に起り批評百出、恰も洪水が一時に彼れの頭上に落るが如くなりし、或人は曰く彼れは事を爲す過急なり、或人は曰く彼れは事を爲す過緩なり、或人は曰く何ぞ早く南北を調和せしめて、人民を塗炭に救はざる。或

人は曰く何ぞ早く大擧して醜類を全滅せざると、小人區々の議論、實に彼れの周圍に囂々たり、然れども彼れは大岩の洶濤の中に立つが如く、動かず、惑はず、緩急進退、應機臨變、愛を失はず、義を失はず姑息せず、躁暴せず、能く其度を得て其目的に進みたると、今にして之を思へば實に驚くに餘りあるなり。若夫れ彼れにして微からんか、合衆は破れ自由は亡び、禍害は綿延百代に及び、止極する所なかりしなるべし、彼れは安眠平首せず、晝夜焦心經營する中にも、苟も人の注意忠告ときけば、則喜んで之を受け、而かも之を重んじたり、然りと雖ども彼は亦鼠首兩端衆人の鼻息を窺ふことなく、唯本良に照して活動したり、乃ち彼れが第二期大統領の撰擧に上らんとするとき、衆敵彼を圍繞して曰く彼れは謀反を鎭むるに於て、小功だもなかりき、或

は曰く彼れは重税を課して民血を絞りたり、或は曰く彼れは專制者なり、或は曰く彼は衆多の血を流したる源因なり、彼をば再撰すべからず云々、斯る誹讟蜂起の中に於て、彼は反りて五十萬の徵兵を要したり、何となれば、實際合衆國の國勢之を要したればなり、凡そ徵兵ほど、殊に戰前に於ける徵兵ほど、人の嫌ふものはあらざるなり、左ればば此時に當りて之を爲す、人望必ず彼を去り、第二の當撰覺束なし、然れども彼れは曰く、吾が第二期に復撰せらるゝと、否やとは、我に於て關する所なし、吾は我が大統領の職に在る間は、則其責任を盡さゞるべからずと、終に顧みずして之を爲せり、然而して彼れ復た第二期の大統領に當撰せり、於此乎人又翻て倫コルンの功を稱し且つ祝して曰く國家萬歲願はくは倫コルン長命なれよと、然ども倫コルンは敢

て其功を誇らずして、曰く我を譽むものあれば、又我を誇るものあるべし、我に滿足するものあれば又我に不滿足なるものあるべし、毀譽褒貶、毫も我に關する所なし、吾は唯だ我が地位に在て忠實に爲すべきの道を行はんのみと＝地位、忠實深く玩味すべし。

吾人は前章に於て畫工カーペンターが倫コルンの悲哀の狀を畫くを見たり、吾人時に謂へらく、若夫れ終始不斷、此の如くんば、如何にして彼れは盤根錯節を斷つの氣力を得たるや、必ずや腦亂れ、胸破れて、悲倒泣死したるべきをと、然れども又熟〳〵彼れの傳記を觀察すれば、彼れは實に別に鬱散の閑地を有ちたりし、聞く彼れは其れほど苦悶最中と雖ども、時々例のイソップ的の快談を放て、周圍の客を大笑せしめ、啻に自己を慰むるのみならず、又能く家族友人を慰めしと

云ふ、然而愚人は其意の在る所を知らず、却て之を觀て詰て曰く、噫嘻斯る國家危亡の時、而かも慘怛悲痛の日に於て、彼れ倫コルンは夷然として無用の諧謔を放つ、さても誠實なき無情漢なりと、嗚呼盲者の象評、斯る小人は大豪傑の全體を見ると能はざるが故に、其の彼れが戲はむるゝを見ては直に彼れを調子外れの人なりと思ひ、其の彼れが憂ふる體を見ては直に彼を心配好の人なりと信じ、其彼れが奮激猛進する途に會へば則直に彼を怖ろしと評し、其の彼れが溫柔和平慈愛の鄕に步むを見ては則彼を優さしき男氣無きの人物なりと云ふ、可笑人豪を觀んと欲するものは宜しく大活眼を開かざるべからず。

一千八百六十四年倫コルン引つゞいて第二期の大統領に撰ばる、時に戰爭猶酣なり、倫コルン嘗て人に語て曰く思ふに余れは此戰爭と共

に終るべし、余れは眞に之を感ずと、蓋し其死期を云へるなり、此故に彼れ若し其生命を全ふせんと欲せば、此時再撰を辭すべきなり、然れども彼敢て之に當れり、何となれば彼れは謂へり曰く余れは我生命を輕んずるに非ず、然れども我國家を重んずるなり、大統領を辭す、是れ我が生命を完ふするの道ならん、然れども國家の爲めに之を思へば猶ほ一期、余が大統領たるの益あるを知る、蓋し余自ら高ぶりて爾云ふに非ず、實に峻坂に車馬を交換するの危險なるを感ずればなりと。

一千八百六十五年三月將軍グラント、將軍リーと大にボルジニヤなるペートルスボルク及び南政府の首府リチモンドの間に戰ふ、同じく四月二日ペートルスボルク陷る、三日リチモンド亦た陷る、リー降る

＝附言すリーは其後赦されてワシントン大學の校長となる＝南政府大統領ゼフエルソン、デビス遁る、追ふて之を捕へ、モンローの堡臺に繋ぐ＝彼れ後放免せらる｜於レ此大戰漸く局を結べり。

夫れ此大戰や延いて四年間に亘れり。而して其劇戰の甚だしきや、一ケ處一二日の中に相方二萬有餘人を失ひたることありし。リーがワシントン府を襲ひたるときの如き、又彼がゲッチスボルに戰ひし時の如き是なり。而して此等數萬の精兵が互に入り亂れて接戰したるの有様は實に非常にて、多くは装藥の暇なく、銃劍を以て擊合ひたるなりと我西南の戰爭の如きは劇は則劇なりしも、未だ一場一日中に數萬人の戰死ありしを聞かず。戰後の計算調書に據れば、北部のみにて戰死者三十萬人、負傷者二十萬人、之を南部に合計すれば則總計百萬人の戰

死ならんと聞へたり。

倫コルンは此間大統領の職掌として即海陸軍の總督なり、諸將士卒は各所に奔鬪轉戰するが故に、全局の勝敗如何を知らず、之を知るものは唯り參謀並に此が總長たる大統領あるのみ、近頃米國發兌のセンチユリー雜誌を閱みするに、倫コルンが當時に於ける軍略指揮、並に新兵徵募の策、其他兵糧運搬等の方案に至るまで、詳細に之を載錄し合せて之を評騰したるものあり、其稿廿有餘號を重ね、余輩は據りて以て乃ち倫コルンが戰略に長じ、經營に富み、臨機應變の神智妙策を運らしたる跡實に贊嘆欽仰の外なきを見るなり、殊に彼れが諸方より電報を受るや直に之を海陸各將に傳通し、全局勝敗のあるところを知らしめ、並せて又諸將の向ふべきところを部署し、發縱指示、能く將

に將たりし有様を觀て、余輩は殆んど不覺、拍案大息。「ア、彼れは既に文にして又武なる哉」との感聲を發したりき、センチユリー記者亦た評して曰く若し南方にリー微りせば四年の戰爭は二年にて終りしなるべし、然れども若しやデビスと倫コルンとをして互に其地位を易へしめ居たらんには、余輩は知らず、戰局の如何に成り行きしかをと、聞く將軍グラントも亦嘗て倫コルンと兵を談じたることありしが、出て人に語て曰く、余れ及ぶ能はずと雖ども然退いて之を考ふれば、是れ亦た敢て怪しむに足らず、何となれば文武元來一途なればなり。

旣にしてリチモンド陷り。リー降り、デビス遁れて捕られ、全市平定するを聞くや。倫コルン直ちに旅裝リチモンドに趨く、此時彼れ一人の兵士をも具せず、平服にて唯だ十二三歲なる末子の手をひきなが

ら入り來る、人々初めの程は其倫コルンたる由を知らざりしが、暫くして倫コルン來れりと噂さするものあり、就て之を見れば則ち彼れなり、於此乎兵士は彼を警衞し、市民は彼を歡迎し、奴隷は彼れの周圍を纏ひ、拜むもあり、跪きて伏すもあり、片言交りに彼をし祝て、或は主と呼び、救者と呼び老幼男女の差別なく、天に歡び、地に躍りて狂ひ躁げる有樣は、恰も基督が驢馬に乘りて、ホザナ〳〵の聲に圍まれつゝ、エルサレム市に入込み賜ひし日も、斯くやあらめと想はしめるほどなりし、嗚呼折薪、子守の倫コルン今は是れ大國の主なり、然而して顧みれば彼れが暴風怒濤を衝き、血雨硝煙を凌ぎ、國家の船頭に身を措いて、鯨鯢を叱咤しつゝ、奮激突進するの時に當てや、見る者之を危疑せざるはなく、彼の英國の碩儒ジョン、ステワルト、ミル

の如きも、大政治家グラッドストンの如き者も皆之を見て大に危ぶみ此航海は到底無難ならざるべしと公言し、ヘンリー、ワルド、ビーチャルが歐洲に渡りて演説せしときにも、皆曰く南方も亦アングロサキソンならずや、一たび進めば又其初に復へらざるべしと、斯て內國を顧みれば精兵數十萬を殺して猶未だ雌雄を分たず、群小は我を疑ひ我を詈り、終には知友すら我力量の如何を危ぶみ、我を輕んじ、中には公然我を指して猿猴よと嘲りたる者さへあるに至れり、然れども彼れは豪毅鐵柁を執て猛進し、遂に國船を自由安全の湊に漕き入れ、天下の人をして皆仰て舌を卷き、伏して心に耻ぢしめたり=ミル、グラッドストンの如きものは遙か後べに瞠若たらざるを得ず=其の德亦た偉ならずや、然れども彼れは決して其德に誇ることなく「余は唯だ我が爲

すべきことを爲したるのみ」とて、質素にリチモンドに入り來れり、四年の大役既に畢り、群敵は粃糠の如く大風に吹かれて去り、國光は海外に輝て阿氏の名世界に轟けり。然りも阿氏は矢張り以前の阿氏なりし、其德更に偉なるに非ずや、加之彼は南方の民及び其兵士などをも暴憎せず、之を憐れみ之を扶け之を免して、各々其家に歸へらしめたり、之を聞く當時二人の賊將あり、偵捕を恐れて將に歐洲に航せんとす、我兵之を探知し、行て之を捕へんと請ふ、倫コルンが曰く、否、免るせ、彼等は今に於て何をかなさんとて、遂に之を不問に附せしめたりと、度量の豁大なる慈仁の優渥なる、實に人をして彼が爲めには死を惜しまざらむるの德あるを見る、然而して此事や彼れが暗殺せらるゝ僅か四五日以前の事なりしと云へば、一層人をして感措能はざ

らしむ。

其死

斯て數日を經て後、阿ブラハム、倫コルン、リチモンドよりワシントン府に歸り來れば、府民は國亂の平定を祝すると同時に又倫コルンを祝すること甚だしく、今まで罵りしもの忽ち翻て媚を呈し、今まで疑ひしもの忽ち悟て先非を悔ひ五月蠅までに附き回る有樣、可笑くも又た淺間し、晝は祝砲を放ち、夜は煙花を擧げ、四年の愁眉を玆に開いて、戸々家々の騷しきまで賑ふ情況、見るにつけ聞くにつけ、感喜と共に暮す中に、數日を經て演劇の興行ありと傳ふるものあり、孰れも久々の事なれば、人氣頓に動きしが上に、戡亂祝賀の爲めなりと云へ

ば、人の喜ぶ樣をも見ばやと思ひ、阿ブラハム、倫コルン乃ち妻君朋友等を伴ひて、劇場に赴きぬ、時に一千八百六十五年四月十四日なりき。

先レ是ブースと云ふ者あり、俳優なり、頗る猛烈なる性を有し、南方謀反黨の味方なりしが、過る年より屢々倫コルンを暗殺せんと試みたれども、事成らず、終に同志の者數十名と相謀り、おさ〳〵尙ほ計畫しつゝありしに、此時倫コルンが劇場に入り來るを聞て大に喜び、數輩と申合せ、暗殺後直にリッチモンドへ逃遁すべき順序幷に暗殺の手段等をも畫策し、馬をも劇場の庭まで引き來らせおき、さて其夜九時頃中入の時、人民の一時出入混雜するを幸ひに、後面より紛れ入りて倫コルンの座席に近きけるに、倫コルンの僕戶に立てり、因て己が名刺

を示して、倫コルンに所用ある旨を告げ、外戸を排して内に入り、竊かに板隙より窺へば、今や倫コルンは朋友妻君の間に在りて、手を欄干に横へつゝ、下邊を見下すの折なりければ、乃ち直に内戸を排し、短銃を差上げ、言ふ時遲く其時早く、一聲高く倫コルンが頭部に射入れたり、倫コルンは一度面を仰ぎたり。然れども瞬時に背後の椅子に倒れて其儘眼を閉て命終りぬ。大尉ラスボンなる勇者あり、倫コルンの傍に居りしが、振り回りて硝煙の中に兇徒を認め、直に躍りかゝりて之を捕へしに、彼方も曲者、銃を投げ捨て、刀を拔てラスボンの胸に刺し入れ、ひるむ處を、狂力を出して、振り放ち、直に舞臺を差して下る。ラスボンは彼を止めよと呼びながら、倫コルンの傍へ取て戻すブースは舞臺へ下るとき慌てゝ國旗に足を纏はれ、眞逆樣に轉墜し、

一脚の骨を打折りしが、狂ふが故に物ともせず、血刀を振ふて舞臺に立ち、見物人を睨めつめ、俳優の風體にて「暴君は常に斯くあれよ」と呼びつゝ。＝嗟乎何等の口實ぞ＝劇場の裏門より逃れ出でんと走り行く。見物人は呆氣にとられて、惘然たる中、一人あり舞臺の上へ躍り行き、彼を止めよと連喚するに、ブースは早や裏門に走り、途遮りたる一人を斬て除くるや否や、同謀者あり、外より門を開て彼を攝受し、直に馬に乘せしめんとしたりしにブースは狂ふて眼の眩じたるにや、其同謀者をも斬り仆し、躍て馬に乘りたるまゝ、電光の如く何處ともなく逃げ去りたり、然れども、其より十七日の後遂に隱家を發見せられ、追れて一の小屋に逃げ入り、中より追者を擊たんとせしとき自己から先きに擊れける。

倫コルンは直に家に送られしゝが、既に快よく眠りゐたり、思ふに彼れは聊かも苦痛を覺へざりしなるべし、何となれば彈丸直に腦中に射入れたればなり。

今此訃音が如何に米國をして慟哭せしめたるか、如何に天下をして悼惜せしめたるか、余輩は玆に之を云はざるべし、何となれば是れ言語筆紙の能く盡すところにあらざればなり。惟だ玆にビーチャル、ストウ女が親しく之を目擊して陳べたる一語を擧て滿足せんとす、曰く此日アメリカの滿天は忽ち妖雲舞ひ下りて、日月も光を失ふたるが如くみえぬ、報弔の鐘は自ら悲んで鳴るかと思はれ、樹間吹く風、底行く流も何となく哀れにきこえ、人々皆互に其親其師其恩人を失ひたるが如き心地したりし云々。

又當時各國に在りては、有名なる政治家、學者、新聞記者等が彼を弔し又評したるあり、今其要を摘んで以て彼を師表と仰がんと欲する吾人の心得に供せんと欲す、當時英國宰相デスレイ國會に於て倫コルンを弔して曰く余倫コルンに於て如何にも至誠、如何にも無邪氣、如何にも愛らしきを見る、而して彼は之を以て萬國の心情を動かし、萬民の友愛を吸引したりと云々。

ジョン、ステワルト、ミル曰く彼れは自由人民に主たる性質を備へたり、彼は啻に一般の人をして驚嘆欽仰措く能はざらしめしのみならず、正直と自由と素朴とを好む人をして景慕措く能はざらしむ。

博士ゴルドウイン、スミス曰く彼は善且高貴なる人物なりし。

ホルトガルのレベル、ダ、シルバ國會議場に立て倫コルンを弔して

曰く彼は幼少の時、貧困の爲めに善き敎を受け、中年の時、勞働の苦を喫して自由と人權の重んずべきを知り、而して成年に及んでは則滿腔の赤心勃發して紅血を國と人との爲めに流しぬ云々。

宗敎改革歷史を記して有名なるドビネ、倫コルンの死を聞き直にスイッルなる米國公使に書を寄せて曰く縱しや彼を以て擒虜人に自由を與へ玉ひしゴルゴタ架上の大犧牲（基督を指す）に比するを能はずとするも、余は今日に於て使徒が「彼れ我が爲めに生命を捐て玉ふ、是に由りて我等神の愛を知れり、此の故に我等も亦宜しく兄弟の爲めに其生命を捐つべきなり」と述べたる……（聖書の一ヨハネ一章十六節）を憶ひ起さずんばあらず、嗚呼誰か倫コルンを指して大義の爲めに其生命を捐てたるものに非ずと云はんや、向後倫コルンの名は實に歷史中最大物の一たるべ

し云々。

佛國の政治家ヱドワルド、レボラヤ曰く倫コルンは所謂る我身の豪傑たるを知らざる豪傑の一人なり。彼れは唯だ己れの義務を知りしのみ、己れの爲めを謀らざりし、彼れの名譽心（善き意味にて）は唯だ其位に居て可及の力と滿腔の至誠を盡すにあるのみ、彼の愛國心は彼れが第二期撰擧の時の演說に滂礴たり。彼は終始實に正直なる阿ブラハム、倫コルンなりし。（此語は米國人民が常に倫氏を稱せし語なり前に見ゆ）

英國リパブル新聞記者曰く彼れは位置と周圍に由りて其誠を動かさず彼れは終始質朴平民的の人なりし云々。

ドローイン、デ、リヘイス曰く彼れは原創的の性を備へ、確實の品格

を有し、而して主義の爲めに動きたり、其勇、其善、其愛國心は直に聖賢豪傑を排して騰上す云々。

其の周圍と時勢

凡そ人の傳を讀むものは、其人の周圍と時勢とを觀るを要す。夫れ深谷に入るものは自ら森嚴幽鬱の趣を感じ、高嶺に昇るものは自ら淸暢快活の氣を生ず。秋は肅殺、春は駘蕩、夏は溶、冬は結、而して人情其間に變ず。此故に人を知らんと欲するものは先づ其時勢を知らざるべからず。人を論ぜんと欲するものは宜しく先づ其周圍を察すべきなり。余之を感ずると久矣。玆阿ブラハム、倫コルンの傳を編するに當り、亦此感を惹起せずんばあらず。

然りと雖ども若事を精細にせんと欲せば、則ち萬國歷史を繰返さゞるを得ず。米國百年記を臚述せざるを得ず、余豈能はんや、右に揭ぐるところのものは、惟だ是れ諸君の注意に供せんと欲するのみ。其旁索博搜に至りては、諸君自ら其勞を執りて可なり。夫れ顧みれば今や終らんとする此第十九世紀なるものは、實に驚くべき時代なりし、旋天轉地の事業此時に起り、拔山倒海の英雄此時に生じ、造化を奪ふの發明、時間と空間とを充たすの學理、又此間に出現したり。然而して自由伸び、政治改まり、人類の進步開達したるの有樣、亦た實に此時より著しきものはあらざるなり。

阿ブラハム、倫コルンは此十九世紀の劈頭に生る、即一千八百〇九年、恰も是れジョージ、ワシントンが死せしより十年後、獨立布告文

を起章したる有名なるトマス、ジェフェルソンが漸く第三順の大統領職を退き之をマデソンに讓りたるの時なりし、然則愛國心の方に熾にして人氣の義に勇む時なるや知るべきなり。降て三年即ち阿ブラハム倫コルンが三歲の時は、抑も是れ如何なる時ぞ、正に是れクレイ、カルホン等が英國の處置を憤り、愈々英國が暴戾にも我船舶を搜索し、恣に英國產の水夫を奪ひ去るのみならず、合せて亦我國自由の民なる水夫を奪ひ去る不正の擧動を止めざるに於ては、我等は再び戰端を開かざるべからずと、猛獅の勇を振ふて國會議場を推動し、遂に第二の大戰を惹き起したる時なりし。降て阿ブラハムが十四歲の時は、即ちワシントンの親友、獨立の救援者、米國の恩人、佛國の義俠、ラファエテが久し振りにて渡米し來り。バンカルヒルに於て大紀念碑の角石を

置くの年にあらずや。思ふに倫コルンは此等を聞て大に感激するところありしなるべし。降て又彼れが義勇兵となりて出陣したる時は、即ち第二英米大戰爭の猛將有名なるアンドリユー、ジヤクソンが大統領たるの時なり。然則倫コルンはジヤクソンがニウオーリンスに於ける擊虎搏龍の働きを聞きゐたるのみならず、又彼れが外交上强剛主義を執て動かず、遂に佛、丁、葡、西の諸國をして賻罪金を出さしめ、米國をして始て世界諸强國の間に嶄然頭角を呈はさしめたる勇氣を見て、大にジヤクソンの豪膽堅志に感化せられたりしなるべし。

然而して顧みて海外を瞻れば彼の有名なるウオーターローの戰は則ち倫コルンが六歲の時なりし、本傳にも云へるが如く、倫コルンが父に從て森林に入り小腕に斧を振りあげて、荊棘錯薪を芟るの時なりし。

ナポレオンは天地を引き裂く勢を失して、蹶然孤島に墮つるの時、倫コルンは渾木小屋の一貧子を以て、方に靑雪を睨むの日、人生の榮枯亦奇なる哉。然而吾人既にナポレオンを云へり、必ずや又ネルソンの猛ウエリングトンの智を憶起せずんばあらず。吾人は既に英佛を云へり、必ずや又普伊の諸國を伴想せずんばあらず。此時普國に於てはウイリヤム皇帝壯圖を抱て、將に乾坤を囊括せんと欲し、ビスマルクは雄志を養ひ堅翮を理して、將に萬里に搏んと欲するの時、而して往古の名都伊太利に於ては則ち俊傑ガルバルヂーが一回羅馬の丘墟を眺めて感慨の涙堰きあへず、憂國愛民の至誠を推起して方に大志を立るの時なりし。

然りと雖ども吾人より言へば、是れ畢竟異國の事のみ、若夫眼孔を

回し來りて當時我大日本帝國の國勢如何を察すれば、實に又壯士腕を扼して起ち、老翁眉を蹙めて語るべきものありしなり。記臆せよ、前にも既に陳べしが如く、コンモンドル、ペルリが初めて、我國に入り來りし時は、即ち倫コルンが恰も國會の議場に入り込みし時、而て木村攝津守等都合七十一人の總勢が始めて米國に使せし時は、恰も倫コルンが大統領に撰擧せられし同年即一千八百六十年の夏に非ずや。然則伊國に於てはガルバルヂー等が、自由を得んと欲して、櫛風浴雨、白煙劍火の間を往來するの時、米國に於ては倫コルンが又自由を人に與へんと欲して大艱險路を辭せざるの時、而して我國東洋の日本に於ては即ち又佐久間象山、吉田松蔭、横井平四郎、藤田東湖等が大に青年志士を鼓舞し、西郷顯はれ、廣澤出で、蒲生怒り、高山泣き、文武

入り亂れて、方に自由を叫ぶの時なりし、天地正氣の滂礴する狀形、東西時を同ふす、亦奇と云ふべし。

然して又學術工藝文物百般の上を觀察すれば、電信も此時に起り、鐵道も此時に成り、滊船も此時より始まり、寫眞も此時より出で、萬古の大事業スエス運河も此時に開けたり、而してウイリヤム、チヤンニングは、此時に於て下等社會の說敎者となり、方に大に人魂の價値を唱へ、ウリバルフオースは博愛家となり、英國の社會に憤躍し、死を以て奴隷廢止の議論を主張し、リチヤルド、コブデン。ジヨン、ブライト。ジスレリイ。グラツドストン等は前後相次いで其間に運動しゴエテは靈妙秀拔の筆を揮て文學界を聳動し、ヘゲルは獨步の勢を以て理想界を驚摧し、カライルは火焰を吐き、マコレイは彩華を布き、ダ

ルビンは世界を一周して萬古の眞理を發見し、リービングストンはアフリカを跋渉して冒險の勇名を擧ぐ、此等は皆前後此間に產したる偉人なり。

若夫れ一々條目を掲げなば、恐くは楳を更ふるも、及ぶに暇あらざらん。余輩は敢て復た之を絮々せず、唯だ其れ倫コルンの時代は此くの如くなりし、此の如き大勢なりし、此くの如き周圍なりし、而して彼れは卽ち此の如き間に生れ、且つ長じたるなりとの感想を讀者の心に注ぐことを得ば則足れり矣。

結論

嗚呼我黨が師表、阿ブラハム、倫コルン既に逝矣。指を屈して數ふ

れば、師は本年八十歲、英國の大政治家ウイリヤム、グラッドストンと同年、普國の豪傑リオポルト、フオン、ビスマルクより長ずるヿ六歲なり。設し師をして幸に兇徒の毒手に僵れしむるヿなかりばせ、或に今尙此等二大政治家の如く、老壯矍鑠たる壽翁ならん。嗟乎余や倫氏に見えんと欲するの至情に堪へず、我理想的の人物を目擊せんと欲するの熱願に堪へず。師にして今尙ほ存在せんか、大平海も廣しとするに足らず、半球の旅行も亦敢て遠しとするに足らず、余は將に往て之に從ひ而して其鞭を執らんと欲す、然而今や亡矣、悲哉。

雖然顧みれば長年必ずしも幸ならず、遭難必ずしも不幸に非らず、神人基督は其敎を垂るゝヿ僅かに三年、地より上げられて死せり、然れども其德萬世に遍し矣。阿ブラハム、倫コルン嘗て曰く我生命も謀

反平定の後には無用なりと、而して卒に其豫言の如く、殉國者となつて終りたり即自ら滿足して死せり、亦た何れの處に遺憾を容れんや、殊に彼れの臨終や、如何にも平和に如何にも高貴に、一ツの苦もなく一ツの悔もなく我心光明又何をか云はんと述べたる王陽明が臨終の時の如く、我事終はれりとて靈を天父に渡し玉ひたる基督耶蘇の臨終の如く、家にも國にも更に遺言すべき事を有せず。彼れは平然として昇天し去れり、余輩は彼を見ること能はざるを悲む、然れども彼れの人物は晝夜我が寤寐に往來し、髣髴常に坐右に在り、我等又憾むる所なし之を彼のグラッドストン。ビスマルク等が老て尚其功名心を制すること能はず、出でゝ便ち失敗し、坐して終に擯けられ、而していよ〳〵勇退の機を失し、晝夜白頭腦を惱殺する氣の毒なる醜體に比すれば、實

に同日の論にあらざるなり。況んやグラッドストン、ビスマルクの如き英は則ち英、雄は則ち雄なりと雖も、未だ權術の人たるを免れず。又自己的功名心の人たるを免れず。之を倫コルンが天眞爛熳、光明正大潔白無垢、耿介脫俗、至仁至愛、眞智眞勇たるに比すれは、恰も危礁一點、奇嚴崛起の伊豆山を以て秀拔神聖なる芙蓉の峯に較るが如し、一は作爲に出で、一は自然に立ち、一は天に屬し、一は地に屬す。優卑高劣共に論ずべきにあらざるをや。＝之を云ふ、蓋し說あり妄りに奇を吐くと思ふ勿れ＝嘗て有名なる露國の一名士ワシントン府に在り＝原書其姓名を憚りて云はず余大に之を惜む＝偶々旅館の前に立てる時前面より倫コルンが馬車に乘じて來るに遇ふ。乃ち驚いて帽を脫し、之を隻手に挈げ、待つことしばらくす、既にして過ぎ去る、而て彼仍獨

其帽を被らず、米人なる友之を見て戯れて曰く君何ぞ鄭重なる、此處は共和國のアメリカなり、ロシャに非ず、君其れ之を忘れたるかと、然るに露客は顏色を正し、頭を掉て答へて曰く、否々、余が眞に赤心誠意より崇敬景慕して措く能はざる人物は、世間の廣き人類の多き、今や獨り彼れあるのみ、彼れは愛國者なり、政治家なり、而して大小誠意の人なり、君等米人は現在を尊敬することを知らざる也と、實に然り。而して今や米人も既に其非を悔ひ、其德に服し、苟も愛國家として報恩の心あるものは、倫コルン並にワシントンの肖像を客間の正面に飾らざるはなく、皆曰くワシントンと倫コルンとは國家の二柱なり、一は國を外國の壓制より救ひ、一は國を内國の壓制より救へり、嗟呼此二氏は宛ら双星（天文學の所謂）の如く斷えず我米國の天に輝き渡るものなりと、

嗚呼渾木小屋の一貧子も此に至て其榮極る矣。

世の青年血氣者流は動もすれば徒に赫奕燦爛たる功名を慕ひ、妄りに翻天動地の偉業を冀ひ、而して本良と至善と主義と天命と勤勉と正直と誠意と實心とを顧みず、荐りに力を外に求めて、而して之を內に失し、既に源頭を誤て、而して之を末に尋ね、唯英雄豪傑たらんことを之れ冀ふ、惑へるも亦甚し矣。余輩が既に卷首豪傑論にも述べたる如く、眞の英雄豪傑たるものは則ち阿ブラハム、倫コルンの如き者を云ふなり。而して其の之を達するの途亦た、阿ブラハム、倫コルンの如く大志と精神と勉强と至誠と正直と献身的とに由らずんばあらず。蓋し是れ余が一個の私言に非ず、古來英雄が自ら成功の訣を說くも亦復た此の如し。諸君もし幸に此意を玩味し、猶は能く英豪の性行を觀

ば乃ち余が言の誣ひざるを知らん。雖然英豪の傳亦種々あり、史記の列傳の如きもの、血氣青年者の著書の如きは、壯は則壯、快は則快なりと雖ども、能々沈思せずんば、或は其身を誤るに至らん。凡そ傳記を讀むものは、先づ其人の心を讀み次で其人の事業を讀み、而後傳記者の筆墨評論を讀むべし、之を原創的の讀法と云ふ。嗟呼進めよや、諸君進めよや、余輩は此傳を草すると同時に、伏して諸君が脩行達志の功を祈る。夫れ脩行達志の途には誘惑熾んなることもあらん、風雨荒るゝこともあらん、山嶽横はるともあらん、然れども請ふ之を記せ。凡そ世界に忍克悲慘、困苦澁難を經ずして、而して英傑たるもの更になし。大艱大苦の波濤に克て、尚能く運動するもの、之を眞の英傑とは云ふなり。

大正十三年十一月五日印刷
大正十三年十一月八日改版發行
昭和三年二月十五日再版

定價一圓

著者　松村介石

發行者　福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五

印刷者　澤田文雄
東京市外西巣鴨町庚申塚一二六

印刷所　學園印刷所
東京市外西巣鴨町庚申塚一二六

發行所　警醒社書店
電話銀座一五八七
振替東京五五三

120-DO-3-60-成

日本出版貿易株式会社

JAPAN PUBLICATIONS TRADING CO., LTD.

(NIPPON SHUPPAN BOEKI KAISHA, LTD.)

Importers-Exporters

CENTRAL P. O. BOX 722, TOKYO
No. 1, Sarugaku-cho 1-chome, Kanda, Chiyoda-ku,
TOKYO, JAPAN

CABLE ADDRESS:
"SHUTSUBO TOKYO"
ALL STANDARD
CODES USED

TELEPHONE:
TOKYO (291) 7751~8

Ref. my letter of
May 31, 1961

ABRAHAM LINCOLN DEN
(Life of Abraham Lincoln)

by Kaiseki Matsumura

published by Keisei-sha, Tokyo

printed in February, 1924

The author, now dead, was a well-known orator. He was a Christian.